

A dirt path winds through a dense forest. The path is narrow and made of dark brown earth, with some fallen leaves scattered on it. The forest is lush with green foliage, including tall trees with thick trunks and dense bamboo thickets on either side of the path. The lighting is bright, suggesting a sunny day, with sunlight filtering through the canopy.

アラン

わが思索のあと  
(中)

高村昌憲訳

私には二組の聴講者がいました。両方とも大変に質が高く、アンリ四世校の男子たちと、コレージュ・セヴィニエの女子たちでした。両方とも同じ理念と厳格なやり方で教えました。大変早いうちの質問や議論や生徒たちによって行われる発表、そしてあらゆる怠惰な手段を排除しました。苦労してついて行き、大変な努力で勉強してから解って来る学習が、一人ひとりの精神を最良のものに解放することを私は経験から理解していました。両方の聴講者は直ぐにそのことを見抜き、雄弁家の男子も女子も直ぐに思い止まりました。時として永遠に立ち去りました。そんな者は名前を消すだけでした。沈黙して抵抗する者も何人かおりました。特に男子においては、お互いに変りましたが、興味のあることには耳を立てて聴きながらも、全く別のことを考えている或る種の技術を持っていました。あらゆる教育は不注意によって生きます。しかしながら、全てを吸収する英雄のような者たちもいただろうと私は信じます。でも、私は何も分かりませんし、私はこのことに好奇心もありませんでした。その高いレベルのクラスでは、決して生徒たちを強制させる習慣があつてはなりません。もしも生徒たちが出来るとするなら、彼らは自分のために自分を救うことです。

私は、大変自由にそして大変正しくプラトンを教えました。この著者は殆ど読まれないで誤解されていましたが、大変有名であるという特権を持っています。そのために読者や生徒のやり口に、高慢な観念を与えるに違いありません。何故なら、この真似の出来ない詩に彼らは魅せられる儘になり、大した疲れもなく彼らが与えていない努力を、煉獄や道の門の如く与える必要のある部分である、と結局認識するようになるからです。それは多くを知ることです。そして行ったり来たりして、迷い、突然に飛び立って、群を待つプラトンの方法は、恐らく人間に相応しいのです。私も注目した処では、それは横目遣いで大変に狡い休息を取った後でしか、決してものを良く見ないのです。私はこれらの脱線や余談を、大変自然に真似しました。有名な神話ではありません。私は少なくともそれらを伸ばして長くして話す技術を持っていましたが、それは決して些細なことではありません。それらの休息時間は長時間で、寧ろ並外れた冗談から成っていました。例えば雌羊が子羊に説明するものですが、彼らに起きることは全てが良いことであり、主人も良い人であるというその種の話です。あるいは古代エジプトの王が奴隷売買を合理化したので最早、監督も主人もいなくなって仕舞った話です。あるいは更に、イギリス人とその娘のメリーがスピノザの『エチカ』の家を訪問する話で、重々しい鍵の束を持っている門番、その横にある礼拝堂、そして想像出来るもの全ての話です。これらの話は年々繰り返されましたが、新しい話も加わりました。同様に、全てに決して好奇心を持たないで、告解者と知り合いになることもなく、救いの手も差し伸べないジャンセニストの聴罪司祭の話（スタンダールのピラート神父から思い付きました）もありましたが、それは自由と正義への二重の愛によるものです。もう一つ別の作り話は、無頓着な少年たちにもっと直接的に噛み付きました。「私が君たちを注意深く聡明に、ついには誰にも打ち克つ人にする秘訣を持っていると仮定してみましよう。私はこの様な武器を君たちに与えないでしょう。君たちを助けるために、手だけでも差し伸べるでしょうか。それは正しくないでしょう。幸いなことにその様な方法はありません。君たちには探求する余地

など何も無い完全な証明があると仮定してみましょう。もしも私がそれを持っていたなら、大変注意深くそれを君たちから隠さなければならないでしょう。最悪の場合には、証明は精神を事物に変えるだろう、などとラニョー先生は時々言っていました」。この談話はプラトンの的です。彼らは魂を見捨てるように見える丁度その時に、魂を引き寄せます。私はこれらの遊戯を愛しました。少年たちが歳を取ったなら、私と同じ様な喜びをもって思い出して貰いたいと思います。私は少年たちに言います。というのも少女たちに行われている教育は、空想がもっと少ないように思うからです。それは理解されています。

プラトンについて私は終わりそうにありません。『国家論』の対話だけでも（本当に大変な長さです）、今日でも明晰さがあり、如何なる間違いもない教説の二つの面を仕上げる機会になりそうです。一つ目は名高い〈洞窟〉がまさしく有名な隠喩によって決して汲み尽くせないことです。もう一つは有名なエルの神話です。そして私と知り合った生徒たちは、これらの巨大なアーチの下を何度も通ったのであり、通らなかった生徒は一人もいませんでした。ここでは私自身の進歩を示すことは出来ません。一回毎に私は前進しましたし、これからも一回毎に前進するでしょう。プラトンの注解者の一人でプラトンに反駁している者たちの一人である人ならここで、こんなことは全て知られているし、子供じみてると言っ、大きな眼を開けるでしょう。多くの知識の段階で一回毎に私が感嘆するのは事実ですが、何の知識が無くてもその意味を全て知るようになることもあります。何故なら、どんなに真理が隠されていても、経験によって掴まえること、それももの見事に掴まえることが出来ないことはない、と私は思いました。中国人やエジプト人は彼らの古文書の古さのお陰で、数学による間接的方法を必要としないで彗星や食に精通していました。この様にして私は、その当時横行し始めていたプラグマティズムの片方の耳を持っていたと言えるかもしれません。もう一つの耳は、プラトンの『テアイテトス』の中で掴み、プラタゴラス自身があなた方にそれを取らせてくれます。その様にして人は自分に有用なもの、そして単にそれだけを真理として何時も取らせてくれるこの命題を、暴君とか將軍の水準まで彼自身で高めるようになるのです。私が前に引き合いに出した者たち流の冗談を言う好機でもあります。というのも、軍隊に敵が逃げると信じさせるのは有益であり、暴君は不死身であると暗殺者に信じさせるのも有益であるからです。私は体系の中心部分を発見するための最良の道というものを理解しません。それは自由であることが確実であるためには、それを意志的に自発的に行うことで十分であり、私が理解した瞬間に結局はあるが儘に洞察力があつて強い姿を現すのです。しかし、先ずは意志がなければなりません。それ故にこの逆説を前進させることです。最初は活力が非常に少なくても、真の信仰を発見したのです。道は他にも幾つかあります。それらの意志との一致が、確かなやり方を明らかにしています。それ故に私はプラトンを読むことを勧めますし、繰り返し読むことを勧めます。では〈洞窟〉に戻って、囚人たちの言うことを聞いて下さい。彼らには影や反映による囚人としての学問をきちんと持っており、彼らに時間と忍耐力があれば、際限なく理解させてくれることも出来るのです。

私はここで出来るだけ全ての光を投じるために、偽善者の顔を表していたプラグマティズムにとっての良い機会を捉えなければなりません。〈ピュロスの像たち〉（勇敢な生徒たち）がその点に関して農夫のように疲れていたことを私は思い出します。最初に注意すべきことは、プラグマティズムの魂とは意志としての信仰の教説であるということです。私がおの様に理解してい

ることは今まで見たとおりですし、これからもその様に見るでしょう。しかしこの教説は、聖職者や不信仰者から二重の厳しい尋問を受けて酷く苦しめられたので、何時も元に戻って何らかの方法で縊りを戻さなければなりません。何故なら、プラグマティズムは私たちの精神に必要となるものを信じるようになるのが、真実である訳ではないからです。反対に、プラグマティズムの中に真実があるということが最初の信仰であり、それが私たちの全ての認識の基礎となって、ついにはプラグマティズムの残りの全てを悪しき策略として非難するのです。というのも、全く皮肉っぽい見せかけに対してデカルトの大胆な操作に私を限定するためには、自由に疑うことであり、独りきりの亡命者になって人間としてすっかりきれいになった純粋な結晶としてついには世界に姿を現すようになるからです。それ故にプラグマティズムの真実を、しかるべき場所に置かなければならなかっただけです。そのことはプラグマティズムの仮面も名前も同時に取り上げるのです。というのも、眼を閉じて一つの認識に私たちを導く事物に沿って行動する必要は少しもないからです。その行動は、何時も単なる最初の行動です。判断力における行動は、反対に私たちは眼を開けて、幾つもの観念を通過して、経験まで生気を与えます。そして、その上でやはりプラトンはその点に関して私たちの教師でしょう。何故ならプラトンは、高次な考えの段階で、あらゆる知識を理解する盲目的な知識による広大な領域を私たちに発見させたのであり、知識の可能な全ての領域を私は言いたいのですが、それは知識の最小の輝きでもないのです。それ故に、明るくなったり暗くなったりする〈洞窟〉と、そこに住居する利口な者たちを、人々が更に長く考察することを私は挫くことなく勧めます。

道徳的教義は分散させられているから、把握するのは更にもっと困難です。しかし、グジェーヌの指輪(1)は、先ず私たちの心を打ちます。というのも私欲と慎重さの規則は、経験に基づいて大変良く誇張されますが、ある程度の権力にとっては恐ろしい意味を持つようになるからです。この光は先ず消えます。プラトンは私たちを置いて行きます(寧ろ、それは私たちの救済に全く無関心なソクラテスです)。次には、良く管理された魂の均衡と健康としての正義の教説に何度も手が加えられて描かれて行きます。地獄への落下は、その青白い光の中で全てが終わります。権力を選択すべきでしょうか。あるいは寧ろ、権力を恐れる必要はないのでしょうか。もしもあなたが小学生の頃に仕方がないにしても後を辿りながら読んだなら、一步一步創意工夫するように私はあなたに教えます。

しかし、私は上昇して行く段階でのあの素晴らしい精神の叙述に戻りたいと思います。戻るとは、もしも私が一つの方法を持ったなら、まさしく私の方法になります。そして全てが言われて仕舞ったような時でも、まるでプラトンが全てを奪い取り人が自分で創るのと同じ観念を奪い取るのを是非とも望んでいるかのような時でも、同じ問題にもう一度ぶつかることです。低次には、只憶測して真実らしいことを考えるだけの愚かな意見があります。ここにあるのは井戸端会議、市場のざわめき、辛辣な口論、響き渡る罵倒、怒りや熱気や同一意見による軋轢によって信じさせるもの全てがあります。それは人間の思考の広大な本性です。巫女や予言者たちの王国です。それは言葉の後を辛うじて追い掛けて、音声の十字路で生じ、思い違いに執着して、新たな波紋を呼ぶ不条理になります。ここでは精神そのものが結び付いて自分自身を分割し、一種の恐怖心以外からの動機はありません。遠くを探さないで下さい。もしもこの思考に名を付けるこ

とが出来るとしても、この思考は私たちの裡にあるのです。この思考は全ての始まりです。正しい見識を持つ人が、言わないで置くことを覚えるのもこの思考です。そうでない場合には、人夫に拳を上げたり、給仕の頭に皿を投げるのです。倍加した罵り言葉は、この種の狂気を隠します。それは人生の谷間ですが、誰にでもあるのです。

その上で正しい人は、慎重さと節度という特徴を持っています。人間は人間の声を聴き、旅をして、職人と仕事、町全体の慣習、広く認められている格言、心密かに繰り返されていること、そしてもっと適切に言うなら、人が行っていることを観察します。習慣による論証がここではあらゆる力を持っています。何故なら変わることはない習慣は、現実の条件と合致しないようなことを認めるのは困難であるからです。この知恵は職業として覚えますし、同様に売ることもします。ゴルギアスの論証は、彼に意見を求める人々、更に彼の意見を理解したいと思う人々の言葉を引用することだったのです。これらのソフィストたちの多くは立法者でした。しかしもっと適切に言うなら、あなたは水先案内人、農民、樵、漁師、狩人、徒弟だった人から親方になった人々を感嘆して見て下さい。彼らは植物、雲、水面の波紋を了知しています。天気、収穫時期、渡り鳥の飛来を予想する幽かな目印を感じ取って嗅ぎつけます。薬になる植物、害になる植物、食料になる植物を教えてください。それらの全てを殆ど間違えません。しかし道具や機械、弓、梃子、車輪、水車、舟、雌牛、犬、猫、小麦、腐植土などの発明品の全てを、人がそれらを知る限り、大いに試して検討して見出されたものなのです。それらの理屈が探求されるよりも大分前を、もう一度考えなければなりません。人間にこの摂理がないとするなら、時間的余裕がなかったからです。そのことに感嘆するのはまさしく正しいことです。そして今では専門家とその技術を尊重するのが一般的な風潮になっているのですから、あなたは成功した者を尊敬するように心がけてください、と私はつけ加えて言います。この有名なりフレインを少し唱えて下さい、

「我々は物自体の何を知っているのだろうか。我々の上に及ぼす効果が我々には重要なものの全てである時、知識は我々の役に立つのだろうか。そして更に、我々に軽く触れたり、傷付けたり、時には殺したりするこの未知の實在に関して手や眼や耳への効果でないとするなら、これまでに我々は何を認識しているのだろうか。そしてこれから何を認識するのだろうか」。この明証を自分に与えなければなりませんし、満足も自分に与えなければなりません。

大変に結構です。しかし、これが全てではありません。幾何学を少しでも聴講して勉強した人なら、本当の認識は信頼を与えているこの種の証明には関係がなく、それを疑うことも出来るのです。それらの幾何学の証明は、決して信頼とは無縁です。反対に、不信を与えます。それらの幾何学の証明は、経験を全く素通りして行く訳ではありませんが、厳密には証明しなかった処が質問状態の儘残っています。それらの新しい結合は仮説と言われています。賢明な幾何学者は、それらの仮説に真実か虚偽かを与えるのに十分気を付けます。私が仮定するものは、真実でも虚偽でもありません。真実であるものは、仮説から命題への帰結なのです。更に、命題は完全に真実であると言えるのでしょうか。この気高い美しい言葉は、私たちに慎重にさせてくれます。命題は、仮説が事物の本質を極めて正確に表している限りのみ真実なのです。それでは経験によるのでなければ、如何にしてそれを認識するのでしょうか。プラトンは、仮説から結論へ何時も降下する普通の幾何学のあらゆる長所を間違いなく表しました。そして最後に言うようになるのでしょうか、人が求めているものにより良く準備された網を、経験の中に張ることしか決して行

わないのです。今は、少なくとも何かを裏切った顔付きをしている者たちから、幾何学者たちの利益を図って下さい。定義と経験の間の道を判読する、活発で絶対に間違えない計算家に諂いたくなる欲求を、すり減らして涸渇させなければなりません。その様な人物は水先案内人を驚かすでしょう。同様に、手形の割引を計算する術を知っている者も高利貸しを驚かすでしょう。しかし実際には、もしも数学が要約された創意工夫からなっているなら、それも一つの技術ではないでしょうか。それとも眼を閉じて実践すること、まさしくわざと眼を閉じるのも技術ではないでしょうか。数学者は知らないことを自慢します。この様なことが彼の常套手段です。代数は、人が言っていることを認識する重荷を軽くします。これらの威信は、有名なアンリ・ポワンカレの哲学的発展の中で働いています。操り人形の見世物では礼儀正しく見とれるように、先ずは心を奪われる儘にならなければなりません。プラトンはその門の入口で私たちを待っています。

仮説を少しも見詰めないのなら、好奇心を持っていないに違いなく、殆ど自分の精神を愛していないに違いありません。何故なら如何なる仮定でも構わなくなるからですが、それが仮説でしょうか。そうではありません。私が仮定する時は屢々推測しますが、単純な推測からでは何も証明出来ません。少なくとも精神に相応しいものと結び付きながら、今度は全く幾何学者と逆に、仮説から仮説へ遡ることが重要になります。ここには事物の秩序と全く反対の、寧ろ無秩序と呼んだ方が良いデカルト的秩序が現れます。プラトンはここに私たちを置き去りにします。恐らく精神に従って仮説を秩序づけることは非常に困難であるからでしょう。しかし時々プラトンは、単から複へ、同一から別々へ、静止から運動へ、存在から非存在への対立のように、何らかの対立を私たちの精神に対して輝かせます。その中で人は先ず、知識による或る無秩序しか見ません。パルメニデス(2)のような奇妙な戯れであり、何も導きません。

プラトンはもっと良いことを言っています。というのも経験はここで私たちに何も教えることが出来ないので、思考というまさに名誉のために、最良の秩序を見付けることが重要になるからです。それ故に私たちの試みが如何なる価値を持つにせよ、今の私たちを導くのはまさしく思考することなのです。そこから『国家論』の素晴らしい曙が、二つの太陽を一緒に見せてくれます。その一つは、感覺的事物による感覺的神であり、それは感覺的事物を照らします。もっと適切に言うなら、河や収穫や動物や人間として存在させます。そして、英知的事物の地平線にはもう一つの太陽、つまり全ての観念を理解可能にして、全てを生み出しもする〈善〉の観念があります。しかもこの〈善〉は、観念と言うことさえも出来ません。それは立派さにおいて、その存在にも観念にさえも勝っています。素晴らしい太陽です。プラトンはそのことを最早言いません。これで十分なのです。真実そのものを言うなら、ある意味では真実は超えられています。実際に私たちがあらゆる暇を使つての旅を終えた今、真実は私たちの遙か下方にあります。真実でないものとは何でしょうか。全てが真実ではないのでしょうか。国家的理由はないのでしょうか。魔法使いにも、狂人にも言い分はないのでしょうか。プラトンは私たちをそこから指揮しません。彼は少なくとも自ら身を投じると共に私たちも投げ入れるのは、間違つて思考するのが出来ないことの中であり、それは何も考えないことであり、何ものでもないことです。

この例からお分かりのように、その注意力は如何に倍加され、そして更に如何に倍加されるのか、それは宗教的に細心にテキストと結び付き、ついには著者自身の外へ著者を引き出して仕

舞います。それは著者のテキストを捏造していると言われるのかもしれませんが。しかし、人がテキストの上を飛び立っているとさえ信じる瞬間に、次の頁はその人が言っていたこととこだましているのを私は何回も観察しました。注釈者のこの遊戯は、何回も読み直すことが前提です。そして、手にペンを持って創った抜粋は殆ど読み返されないことに気付いた後で、私は引用して書き留めて良いことは何も無く、記憶に留めることで探さないことであると知るに至りました。寧ろその本に書かれている思考なら、どんな処でも躊躇することなく見出せるまで慣れ親しむことです。これは教養でしかありません。何故なら野蛮人が先ず抜粋を創って、それしか読み直さないとしたなら、如何に野蛮な人だろう、ということになるからです。この野蛮人は人間の中にもおりますし、そのことを私は良く知っています。全ては読むのを学ぶことです。

私がここで言いたいことは、既に私が何かを教わったプラトンというイマージュの中にある、上がったたり下がったりするこれらの旅ですが、それは容易ではなく、人は新たに難解なものを発見するでしょう。プラトンは翼と勇気を与えてくれます。晴れた日にはこれらを利用しなければなりません。霧の日にはデカルトの慎重さを持ち出し、スピノザからは二百歩の処にある太陽を守らなければならないことも私は学びました。そういう訳で、もう一つのヤコブの階段を登るのは難しく、素早く専門家が魔術師に、計算家が専門家に舞い戻るように、どんなに容易に人は舞い戻るのかに気付いた私は、この不安定な状況が私たちの本性であると思いました。そして私たちの運命は、ソクラテスが大変上手く行う術を知っていたように、常に愚かさから出発して愚かさへ素早く戻るのであると私は思いました。こんな風にして、ある時は「いや、これでは未だ不可ない」と私たちは自分に言い聞かせて、拒絶から拒絶へと上がって行きます。そして反対に、受諾から受諾へと〈善〉の考えを失って、私たちは最低のものになることもあります。最低のものは眠りです。私にはすっかり分かっているのですが、古代ギリシアの巫女は両眼を開けて眠りますし、巫女の占いを聞く者たちも殆ど目覚めていません。技術者もこの反芻状態から遠くありません。結局のところ人は高次に止まりませんし、途中の段階にも止まりません。それでは結末はどうなのでしょう。この継続している脈拍が私たちに意識を与えているのであり、プラトンの天界に相次いで触れることが、私たちの思考にとっての唯一の光になりました。要するに私に与えられていたものは、人間としての高度な考えです。というのも人間は誰でも屢々意識を持ちますが、僅かな時間であることを私は良く理解していたからです。そこから意識の大問題に殆ど匹敵すること、私が既に説明したように意識という言葉が持っている唯一の意味に立ち戻らせることを屢々私に思わせたのは、眠りと目覚めの教説です。これらの問題の論拠には再び触れることになるでしょう。しかし、難しい分析は一先ず終わりにして、全体を俯瞰しなければなりません。もしも私がそれらの証明が可能であるとしても、私は決して与えないでしょう。それらの問題は、門戸を開けた儘にして置かなければなりません。しかも人は態度を決めて保持することも要求されているのです。しかし、一度に多くを言い過ぎないようにしましょう。(完)

(1) グジェースはリディアの王(前六八七年?~前六四八年?)。プラトンによるギリシア文学の伝説では、空想で妻と結婚して魔法の指輪で姿を消す力を持ったと言われる。

(2) パルメニデス(前五一五頃~前四四〇頃)は、古代ギリシアの哲学者で、エレア学派の祖。

## 十二 カント

屢々、推論的思考が物事を決定しているように見えたことに恐らく驚いていたアリストテレスは、その推論的思考だけによって全ての証明を教説に入れようとした。そのことに彼は成功しました。彼以上に出来る人はおりません。そして、推論的思考の不可能性と必然性の全てを網羅し尽くすまでの研究は、論理学と呼ばれました。例えば、AとBが如何なるものであっても、AとBでないことから、BはAでないことを引き出さなければなりません。ところが全てのAがBであることは、全てのBがAであると引き出すことは出来ません。少なくとも何らかのBの一部がAであると言うだけです。私は何時もこの教義を隅から隅まで教えました。けれども形式でしかない必然性に、直接指で触れてみることは大変に重要です。私はもうそれ以上のことは言いません。そのことは何処でも大変上手に行われます。それが精神の樹皮になるのです。

プラトンはもっと遠くを見ていました。真のプラトン主義者は、殆ど自分で言っていたし人も言っていたように、それはカントです。それにはカントが、形式の必然性は言語の単純な法則を超えて遙か彼方に及ぶことに気付いていたからです。それはカントが、古典的論理学に先験的論理学をつけ加えたものでした。少し乱暴な例が、私たちをその問題に投げ込んでくれるでしょう。アメリカの各新聞がある日、十二と十三の間に、十二でも十三でもない整数を発見して、今までの研究から漏れていたと報道するのを仮定することが私は好きでした。そんなことはあり得ないし、純粹理論でしかないと言ってこの例を人は馬鹿にします。いいえ、これは純粹理論ではありません。カントは、七と五の数字そのもので十二になるかどうか、あるいは反対に七+五=十二の命題が、その主語に何かがつけ加わっていなかったかどうかを自問しながら、七と五の数字を多く移動させて調べました。カントは、私たちの認識を豊かにする判断を総合的と呼び、既に言われていたことを繰り返すだけの判断を分析的と呼ぶことを望んでいました。私はその区別を連想します。何故ならそれは有名であるからですが、大変有名な「私は考えることを考える」を除いて厳密に言うなら、私は分析的判断を決して見出さなかったのは事実です。これはもっと後で、適切な処で出てくるでしょう。差し当たっての有益な仕事は、所謂分析的判断を追跡して克服することにあります。例えば、二足す二が四になるのは分析的判断ではありません。何故なら、二足す二は四の定義になっていないからです。四は三十一によっても作られます。二十二の結合が同じ四になることも証明しなければならない儘残っています。七+五=十二であるということも、七+五=十一+一であるというように書くのも正しいと私は思います。何故なら、十一+一は十二の定義であるからです。そして、この形によって直ぐ分かるのは、五を分解した（七+一+四）が八+四になり、その次には十一+一まで続けて行くことが出来るからです。私はいやいやながら要約します。何故ならこれらの見事な例において精神は、その証明を行う困難さに占有されません。その時、精神はあらゆる側面から吟味することが出来ます。そして何を見付けるのでしょうか。別々の二つの方法で一つの数字の形が、その特異な特質を持ちながら、新しい要素の発見になっているのを精神は見出します。例えば十二に一を加えれば、十二とは全く別の一つの数字を形づくりします。そして、私たちがこれらの全ての操作から数字を分解して再構成するのは、一種の経験から生まれます。けれどもそれは可能事と不可能事を私たちに与えます。



というのも十三は素数であって、永遠にそうであることを私たちは良く知っているからです。

今度は有名なデーヴィッド・ヒューム(1)まで遡りましょう。彼は、独断の眠りからカントを目覚めさせた名誉を担っていた人物です。この表現はカント自身のもので、この懐疑家のヒュームは、或る球が他の球にぶつかりとそれを動かすと期待するのは、何時もその結果を見ていたからで、そんな風にして私たちの信頼は、自分たちの中の経験の重なりから齎される、と言って面白がっていました。しかし、この経験を幾ら合計しても、その球には何の影響も与えないともつけ加えて言っていました。経験は球の中にありません。更に、もしも骰子の一つの面以外は全て同じ数字であると気付いたなら、あなたはこの数字に賭けるだろうとも彼は言っていました。けれども期待とか蓋然性への感情は骰子の中には無く、骰子を入れた筒の中で回転して、反復した数字から如何なる衝撃を受けることもなく、テーブルの上で決定するのです。最早、ヒューム以上に難解な人はいません。タイの国王の話ならもっと明快です。国王は常に液体としての水を見ていたので、像を運ぶことなど決して出来ないと判断していました。タイの国王の経験も又、水の中にしかなかったのです。私たちの最も強い信頼でも、可能事と不可能事については何も示さず、経験が私たちに教える処は何処でも言っていることに止まっています。決して未来を拘束するものではない、とヒュームは結局言いたかったのです。

十二十一の経験は、未来を拘束しています。そして代数学における経験になるものの全ても、未来を拘束しています。カントの例にあるように、右の耳と、鏡に映ったその像を重ね合わせる方法は決して見出されないでしょう。ところがこれらの二つの形状は、概念としては同一です。でも重ね合わせられないようになっていることは、注意して見ればはっきりしている各部分の一つの形状であり、重ね合わせることを不可能にしているのです。私は、これらの形状の中で、そしてあらゆる形状の中で認識することも、事物の質量が保持されない必然性があります。しかし、純粹空間の中では、諸関係を保持する必然性を私は認識しました。そして私が言葉で述べる事が出来ない空間のこれらの特性を確信するのは、常にそれらの構成や操作によるものです。私は直線を引きます。そして、それは二点の関係であることを認識します。私はそれを実現させていますが、実体はありません。何故なら、それは私が推理している図形でしかないからです。それ故に空間は形式になるでしょう。その上、空間が関係によってのみ成っていると理解するならば、空間は思考されたものであって、存在するものでないことが分かります。カントは、プラトンのように良く探求しましたが、形式を下方から捉えていました。私はこの点を疲れるまで強調しました。しかし、形式と実体を区別する術を知ったなら、人は曲がったり真っ直ぐであったりする空間、有限とか無限の空間、事物としての空間の何を思考するのでしょうか。法螺吹きたちは逃げ出します。それが正義や平和の何に役立つのか分からない、と人は言います。少し我慢して下さい。やがて分かることでしょう。

数学の構成や分解や移項は(代数においても)、純粹空間を推測します。つまり罫も不意打ちも無い安全な布地を推測します。しかし、これらの系列、継起、連続を導くものの中には、感覚的でないより抽象的な時間という別の形式が現れます。純粹力学は時間の形式を推測します。それは動体の位置や郵便物の場合やこの種のもので予想されますので、経験以前を完全に認識します。しかし算数だけは、級数のN番目の項を計算するので、同じ様に確実に予想します。でも、一つの数字の次とか一つの項の次とか、何時か欠けるかもしれないとは誰も推測しないです。

よう。しかしながら困難はこの点にあります。これらの逆説は大変に容易です。この形式についての説明は、『純粹理性批判』の中で、短くても大変明瞭に行われていますけれども、時間については一度ならず熟考しなければならないと私は思います。

空間と時間は形式です。つまり思考のやり方ですが、必然的で、次々に精神に輝く観念を与えて行きます。何故なら、それは普遍的精神と言わないにしても、少なくとも人間の精神であるからです。空間は均質で連続しています。決して欠けていませんし、これからも欠けないことを人は知っています。それは任意の境界を持った二つの側面です。あらゆる経験に先行している全てのもので、そこから如何なる経験もそこでは可能ではありませんし、これからも何も可能でない、ということを理解して下さい。同様に空間は一つです。時間も一つです。カントが言っているように、異なる二つの時間は相次ぐもので、同時ではありません。全ての出来事は、如何なるものでも他の出来事の前か、その間か、後に起きます。一つであると同時に全てでもあります。シーザーの死と同時に、渦巻星雲に至るまで、世界の一状態があつたのです。その様なものが絶対的な年表です。しかし、良く見て下さい。あなたは遠くまで連れて行かれます。ヒュームは既に最早、眼に見えない遭難者でしかありません。

ここに躊躇があります。それが、あつたが儘のカントを照らしてくれます。空間や時間というこれらの形式は観念でしょうか、概念でしょうか、あるいは原則なのでしょう。厳密に言えば、どれも違います。何故なら、それらは対象から切り離せないからです。自然の知覚の中で、私たちは幾何学と同じ空間を認識します。そして私たちは唯一の時間の中で旅行をしますし、歳も取ります。それ故に、これらの形式に自然を欠くことは出来ません。正確に描写し、その相違を考慮に入れることが大切です。私たちには、空間と時間は感性の形式であると言えます。私はヘーゲルとアムランの名を挙げます。彼らはお互いにこの相違を無視しました。私としては、私に教えてくれて欺かなかつた彼らに何時も忠実でした。私はこの慎重な態度を守り、時には喜びになりました。私が話している当時、私は登山者のように歩き、案内人の言うことを聞いていたのです。

一つの段階は越えました。私たちは今、悟性へと登っています。『先驗的分析』は『先驗的美学』の後を継ぎます。（美学は感性又は知覚の認識を意味します。）ここで私たちは最も美しい構築物の面前にいます。あなたは『批判』に、十字の形をした表と、各々三つに分けられた四つの表題を見付けるでしょうが、それらは哲学を学ぶ者を感動させるに違いありません。私はこの印象を乗り越えることが出来ませんでした。この種の要塞に私は何度も戻つたということです。決して退却するのではなく、そこから出発するために止まって防衛したのです。何故でしょうか。これらの表は非難ではなく、詳細調査を形づくっているものであり、任意の経験を思考するあらゆる方法が集められ順序立てられているからです。私の眼から見ると、優れた一覧表は最早極めて稀有で数が少ないのです。理由などはありません。

冬の日々は、この研究に適していました。私たちはチョークを使って美しい文字で、範疇（主張の様式）、判断、原則という三つの比較表を書きました。原則への移行には困難な点があります。何故なら私たちの判断方法は自然への立法であるとしても、人には何らかの抵抗がありますし、それは無理もないからです。

本当のことを言うなら、感性の諸形式は私たちに準備を与えていました。何故なら実際の諸形式を何時までも予想することなく、幾何学は全てを把握する術を知っているからです。そして如何なる根拠も予想も無く、解答を届ける使者の問題も、全てを一度に予想するのは明らかであるからです。これらの指摘が理解させてくれるのは、有名なカントの言い方によるなら、〈アプリアリ（先験的）〉に知らされることです。それは決して起こるであろうものではなく、単に起こるであろうものの形式なのです。カントによれば、全ての認識は経験であると繰り返し言わなければなりません。これらの指摘の後では、戦いたいと思ったりしないで、もう一度案内人の言うことに従うことでしょう。そして案内人は、ここで沢山の回り道をします。幾つもの原則のこの演繹には、二つの見方を人は見付けるでしょう。カントなら三つとか十とか見付けたことでしょう。それ程その問題は新しく困難であり、全ての問題の中でも手強いのです。私自身も何度も取り上げて、沢山の方法をやってみました。それでは幾つもの原則の中の、その一つの原則は何でしょうか。それは自覚による統一に一致しなければならない全ての可能な経験であるということです。私は、私が思考することを思考します。それは何時も同一の自己であり、分割出来ません。全く形式的な原則です。私が実際に同一であるかないかを知ることは、重要ではありません。私を絶対的に他の人と思考出来るかどうかを知ること、あるいは絶対的に二重であるかどうかを知ることが重要です。私は、私が変わると思考するなら、同一の自己が変わることなどを十分に思考しなければなりません。そのことが理解されるには時間がかかるでしょう。この統一を砕いた経験は、自覚の中に入って来ることが出来ないのを先験的に人は知ります。そして、そこから出発する諸原則は、その統一と経験の持続を、様々な局面で肯定する方法でしかないのです。

単純に言います。この一寸した橋を渡って始めなければなりません。今は、それらの諸原則が如何に適用するかを見なければなりません。というのも私たちは、何本も線を引いて私たちの全存在をそこに拘束するように諸原則を描くからです。空間と時間の形式が既に、経験による統一を準備していたことは明白です。カントは、想像力の構築を先験的図式と名付けましたが、それは抽象的で悟性に非常に近いものでした。そしてその先験的図式は、存在の注目すべき特性によるなら〈時間〉であり、更にその概念の均等性によるなら〈空間〉です。分かる人には分かって下さい。もしも私たちが想像力で時間に線を引かなかつたなら、私たちの諸原則は曖昧な儘であろう、と私は時々理解するまでに近づきました。只、その分析はここでは余りに簡単であり、後に続く者たちには開かれた儘になっています。その分析が疑わしいと言うものではありません。反対にその道が正しいことを人は理解しますが、その道は作られたばかりなのです。

それは一種の砂漠です。私が沢山踏んだ体系のこの部分の観念を、最後には忘れないで有名にしたいと思う定理を私は与えたいと思いました。それは自己の自覚が経験に基づいていても、「私以外の事物の存在を証明するのに十分であること」が立証されるものです。それは私が嘗て命題そのものを十分に把握したようなものではありません。その証拠が、命題の力を消し去ることに私が気付いた唯一の場合でもありません。恐らく誰もが自分だけの線や運動や困難な事柄に従って、証拠を自分で作り出すのです。従って私は、画期的に見えるこの定理を注釈する度に、必ずテキストから多く離れていましたが、実際はそうではなくて、見た目がそうであったのだと思います。私が自覚で形づくったと理解された観念は、何時も危険で、何時も自己を征服してい

ます。そして何時も世界が齎す証拠を否定しながら、あるいはもっと適切に言うなら、それはこの世界が齎す証拠の雨です。プラトンにより獲得された全てのこの運動で、落下と救済を生む雨は、世界をより綺麗に純粹にする度毎に私に示され、その上絶対的に唯一の型である存在に還元します。その意味で私はカント主義者でした。その意味で私がデカルト主義者になったのは、いかにももっと遅かったと思います。当時の私とカントを思い出すなら、〈先験的弁証論〉は〈分析論〉よりも重要ではなかったと私は言いたいと思います。認識は全てが経験であり、その様に対象に触れて形式や範疇や観念に関して可能な全ての使用を含んでいると私が理解して以来、全ては解決されました。そして純粹観念によって全ての論証が可能でした。つまり題材が無くても、それ以後は好奇心という活動があれやこれやのどちらかを揺さ振るようにしてくれるのを、私は期待することが出来ました。

ところで如何なる結果になったのでしょうか。大変なものだったと思います。私は、余りに人が通らないこれらの台地から垂直に私たちの問題に再降下します。私たちの周りには如何なる政治があるのでしょうか。確かに国民は解放されましたが、宗教にも哲学にも聞く耳を持ちたくないのです。思想家たちは多少なりとも裏切っていると私は認めます。彼らは多くをシーザーに委ねています。しかし、偶像が余りに取り壊され過ぎたと私が思っていることは決してありません。結局のところ革命的思考は存在しないのです。最も学識ある人々はマルクスに仕方なく頼り、ヘーゲルによって明らかにしようとししました。但し、彼らは間違って認識しています。そしてマルクス自身も屢々ヘーゲルを拒絶するのが余りに性急すぎました。でも私は、受諾するようになるでしょう。革命的思想家とはカントです。カントは自由な精神の人々にすっかり忘れられましたし、軽蔑されることさえありました。カントは宗教と道徳の最期の救い主として歪められました。表面上は余りにそう見えるのです。もっと細かく見なければなりませんでした。その精神は人間の事実であり、もっと適切に言うなら人間の機能です。それは私が示したかったように、価値ある全ての認識の中で齎された形式がそこから解き放されます。ここで懐疑家が憤然といくら頭を振ろうとも、彼は問題が分からないから振っているのであると私は言います。その精神は、宙に浮いた仮説ではありません。それは人間固有の機能です。形式と範疇と原則と観念は、私たちの世界認識の要素です。従って幾何学が単なる技術的経験でないということは、疑う余地がありません。人は百回でも反対のことを証明するというのは本当です。首尾一貫した唯物論で、全ての問題を解決するのは本当です。誰にでも出来ることです。私はプラトンを読んで貫きます。そしてそこに自分を投げ入れることは、哲学そのものに無知であることを示すこととなります。カントの〈批判〉から生じるような精神は、決して主人ではありませんし、まして奴隷の主人ではありません。それは反対に、平等化の征服されたものです。自分を精神と認識する者は、忽ち眞の平等を打ち立てます。自分を精神と認識する者は、自ら自由を望みますし、その様にしてありふれた欲求を越えて偉大な〈古代人たち〉のように自らを高めます。この知恵は屢々、革命の指導者たちの中にあります。というのもそれは教義よりも強いからです。献身的に仕える人々や無知の人々にも屢々あります。しかし、それは本能でしかありません。唯物論と宿命論が精神を占領する時、もしも私が間違っていないならば、反省を内部の敵として取り扱うようになります。幾分、学問のある修道士のやり方であり、実際は如何なる現実問題も提起せずに、文献や博識

に陶醉しているのです。ところで唯物論と決定論は、不純物を除いた二個のダイヤモンドのように、カントの〈批判〉の坩堝から出て来ます。私が先に述べた悟性の諸原則は、最も厳格な唯物論の規範を作っています。それらを再度取り上げて、四つに纏めましょう。何が見付かるでしょうか。第一は、可能な全ての経験の対象は測定可能な量を持つということです。第二は、全ての対象は質と段階を持ち、空虚ではないということです。第三は、最早偶然は無いということです。出来事が起きるのは全てが、その変化に基づく確固としたもの（エネルギーのように）に従って、原因から結果への不可逆性の移行に従って、そして交換行為とか全ての世界の変化の間での相互依存に従って決定されるのです。第四は、可能性は経験の外部に何もなく、存在は感覚による以外に自ら認識しません。結局のところ、必然性は何時とも仮言的ですが、当然この記述は十分に人に教えられません。それは、人が殆ど行かない道を指し示しています。でも、〈精神〉のことは何と言えれば良いのでしょうか。それは、その存在が光輝いている塊との対象によって、精神の英知を継続的に支える者や創造者として、精神そのものが自ら認識することです。それは意志がなければ決して保持出来ないものです。従って賢者の甲冑である唯物論を、愚者たちの別の唯物論から救済しなければなりません。民衆の一人は或る日、要約して言っていました、「私の政治とは、私のスープであり、ベッドである」。この言葉は、モンマルトルで次の様に辛辣に私に言った社会主義者を思い出させます。「天文学はよろしい。結構なものである。パレ・ロワイアルの大砲は正午丁度に、太陽の光線に基づいて発砲している。よろしい。しかし、それで昼のスープを皆に与えてくれるのだろうか」。もしも各人が天文学などによって、精神として自ら認識するなら、まさしくスープを与えているのです。何故なら、精神にはスープを請求する権利がないと誰も理解しないでしょうし、スープがなければ精神は自らを見捨てるからです。反対に、動物は平然と殺されるかもしれないことを私たちは十分知っています。少なくとも状況が少しでも追い詰められると、そうならねばならなくなります。それが動物です。何故人間はそうでないと言えるのでしょうか。なにしろ私は、正義に適った人間の側にも、人々を手段として虐殺させて何も見ない、この好戦的精神には気付いているからです。「お前自身においても、他の人々の中においても人間を決して手段と理解してはならない。常に目的と理解せよ」。これはカントの箴言です。実践的箴言であり、全ての理論に対して価値を持ちます。この立場を人は堅く守ることが出来ます。どんな唯物論者もそこに達するのを私は信じています。私が理解して欲しかったのは、この立場はまさに少しも困難ではないということです。もしも自分を先ず精神の人と認識して、その精神の王国の人であるなら、少しも残酷でなくなると敢えて私は言います。ここに私が真の神秘主義と名付けるものが生まれるのをお分かり戴けると思いますが、でも、お気づきの様に、私の教師仲間には大変な不信を抱かせました。彼らが信用しないのも当然です。しかし私が自分の思想を何も隠蔽しないのも本当です。何故そんなことをする理由があるのでしょうか。この義務に反するようなことに少しでも価値があるなら、神の秩序も人間の秩序も決してないのです。そこには私たちの今日の問題があり、明日の問題があります。極めて正確に言うなら、マルクス主義はその発展の中で自由な教義も、〈人間性〉の教義も、戦争の教義も生み出しませんでした。この点で、もしローマ教皇が知っていたなら、彼が優位を占めることでしょう。しかし彼は、個人的救済の技術者に過ぎません。

早速ですが、これからはカントの〈義務〉の問題に入ります。カントが万人の学問を対象とし

て取り上げた後、彼は万人の道徳について批判的方法で、少なくともそれを明瞭にすることを熱心に考察しました。そして、私たちが仮定によって行動させる仮言的命令は誰にも決して感嘆されないことに気づき、決して仮定が許されない有名な〈定言的命令〉に彼は綿密な調査により到達しました。しかし、人々から大変嘲笑されました。嘲笑するのは勝手です。しかし、大切なのは間違えないことです。さて、もしも或る会計係が単に盗みを働いて捕まって罰せられるのが怖いから盗まないでいるとするなら、彼は正直者であると言えるのかどうかを人が私に説明してくれるなら、私は兜を脱ぎます。或る人が真理を求めて学ぶことが結局自分にとっての利益である時、彼は真理を愛していると説明してくれるなら、その時も私は兜を脱ぎます。そして人間は自分と共に人は正しいだろうと期待することで、単に自分が正しいのであるなら、その正しいことを人が私に説明してくれるなら、私は兜を脱ぎます。もっと大急ぎで先に進みますが、どうぞお許し下さい。この分析をもっと分かり易い例でもう一度述べます。私は或る労働組合の書記で、裏切ることも出来ます。これ以上容易なことは他に何もありません。何も書かないことも私は出来ます。相手のリーダーたちと一緒に交渉する口実で、決議事項や計画や指導者について欲しい情報を全て、リーダーたちに与えることが出来ます。これらのことは言葉半ばで済みます。相手のリーダーは、一種の名誉を私に留意する術を知るでしょう。けれども私は、やはり躊躇します。というのも、もしも秘密がばれたなら、私は非難されるようになるからです。その嫌疑は、私に栄光と利益さえも約束していた人民のリーダーとしての道を台無しにして終わるでしょう。美德とは、その様な結果を打算することにあるのでしょうか。そうではありません。少しも迷うことなく言うのですが、美德がこれらの全ての仮定的見積の結果であるなら美德は美德でない、と普遍的判断が教えてくれます。美德は仮定的見積以外の動機によって決まるのです。決してこれらの仮定を含みません。それでは、それは何でしょうか。誠実そのものための誠実でしょうか。原則のための原則でしょうか。動物に降下したくない者の絶対的な名誉でしょうか。自己への宣誓に執着した名誉でしょうか。選択し誓った思想の尊厳でしょうか。これらの言い方は全て同じものです。でも、その内容はどんな中身なののでしょうか。理性でしょうか。それは理解出来ます。というのも普遍的理性は、状況によって決定することが出来ないからです。但し、多くの犯罪にもその名を貸したこの成熟した人物（理性）には用心しましょう。何故なら厄介な証人とか余りに武装し過ぎた競争相手を除くとなると、国家的理由になるからです。精神は自由を自ら望み、奴隷状態に戻る全ての仮定的見積を拒絶する、と言う方が私は好きです。というのも、最も有利なものを選択するのが立派なののでしょうか。そして、もしも裏切りの代価が余りに過少に見えたなら、危険を負うことを考えて、心の底では裏切っているにも恐怖から忠実の儘でいることを決心するのは立派なののでしょうか。立派ではありません。人間は如何なる人でも窮屈な衣服を拒絶する自由を、幸せにも知っています。暗殺した人は、自分の命を救うために裏切ることを拒絶するのでしょうか。真の名誉を守る心の動きは、屢々隠されています。それなくしてこの世は何も進みません。戦争も、この仮定的見積という罪も同じで進みません。そして動物が非常に感覚的で理性を拒否しているのに対して、自ら自由を望んでいる人間は熟考するに際して、自由意志というものが公正に認識するものである真の理性に従うものであることを私はつけ加えて言います。そして、自由という至上の活動が正しく思考する条件であることに、もう一度注目して下

さい。結局のところ、私は既に書いたように、自由は何ものでもありません。そして、人間というものは仮定的見積とか鞭によって導かれると自分自身で決めてかかっている者は、最初から全てに対して裏切っているのである、と私は結論を下します。というのも、労働組合の努力は悲惨や死以外のものも齎すことが出来ると誰が言うのでしょうか。それを言うのは経験ではありません。兄弟よ、もう一度言います。あなたが行っていたことは何であつても、何かに誠意を持っているなら、あなたはそれだけで精神なのです。恐るべきカントの洞察力はそこまで私を導いてくれました。この地質学教授でもあつたカントは或る日、靴屋の判断力が正直な人間の何であつたのかを知りたかつたのです。そこで彼は何を知ることが出来たのでしょうか。ダイヤモンドのように自覚が輝いています。そこで彼は何を知ることが出来るのでしょうか。もう一度現れて来るのは〈精神〉です。〈精神〉は何時も偽りの美德と、それらの仮定的見積を判断し軽蔑しました。〈人間の精神〉と言って下さい。〈絶対的精神〉と言って下さい。〈神の精神〉と言って下さい。あなたは何時も同じことを言っているのです。ユゴーの偉大な口が無信仰者の全くの平静さで言っているのは、「自覚は、つまり神である」。何故そのことが私には全然恐くないのか、後で詳しく説明します。しかしながら、もしも誰かが十二歳の時から六十七歳まで無信仰者であつたとするなら、それはまさに私なのです。私は、自制心を喪失することなく無信仰者であると言えます。それ故に私の証言は興味を惹くに違いありません。

私はカントよりも彼方へ赴きました。しかし、何時もカントに戻って来ました。あの頑固で立派なカント主義者のルヌヴィエは、私の教師の一人でした。学校については多くのことを教わりました。私はペンを持って彼の本を読みました。その時に、教養という正しい観念を手に入れました。でも、カントの『批判』に関する批評には、私は決して同意しませんでした。私は只、ルヌヴィエが改革しようとしたことを見直す必要があるように思えたのです。反対に自由の問題については、彼から教わつたものがありました。それは最悪の場合には決して証明することが出来ませんが、何時も望んでいなければならないことが自由の本質になるということです。私はこの考えを際限なく発展させましたが、但しそれはカントのものなのです。

私は、今でもカントの改革者として有名なアムランも重視しています。彼は、非凡な『表象の基本的要素についての試論』を残して、今私が思考しているのと同時代に亡くなりました。アムランの名声が高かつたために、その本の評判は厳密で体系的で、これは範疇の一覧表であると言われていたものでした。私はその本に飛び付き、『形而上学雑誌』の書評欄に書きました（アムランは既に死んでいました）。それ以来、私はその模範となつた本を擦り切れるまで何回も読み返しました。そして、その思想の核心を理解したと屢々信じ、ラニヨーのものと共に同時代人の思想の中で私が信頼した唯一のものでした。でも、それが真実であつたと私が信じたことは一度もなかつたと敢えて言います。大変に知的で素晴らしいものを創つたライプニッツにも同じことが生じました。私はライプニッツの本も読み、そして読み返しました。時々には洞察を得たこともあります。何時も「しかし、そうではない」と言っているのです。アムランは、殆ど全てについての光と洞察を私に見せてくれました。結局のところ、それは自由な人間の神学となり得るものの全てを見せてくれたのです。彼をヘーゲルと比べるなら、私が考えていることをもっと容易に説明出来るのですが、それはもっと後で述べる方が良いでしょう。いずれにせよ、私はアムランを何度も読んだ後で、カントへ戻つたのです。それはカントに止まるためではありません。寧

ろカントを砕くことなく、あらゆる意味でカントを全ての中で進展させるためでした。そしてヘーゲルからも私はカントへ戻りました。私は、何時もプラトンへ戻ることも既に認めました。私はプラトンの『国家』を、余り学歴がないが善良な或る労働組合員に読むように与えたのは事実ですが、私も彼もそのことに後悔しませんでした。私がここに書くことは、多くの人々も考えることです。でも、そのことを敢えて言う人はおりません。裏切りによる非難はそれ程素早く、恐れられています。しかし、この思想だけで自由への衝動が私を興奮させます。博愛が次に来ます。それは続いています。又、平等は至る所にありますし、何時も私の思想の空気のようなものなのです。（完）

（1）デーヴィッド・ヒューム（一七一一～七六）は、イギリスの哲学者。彼の現象論者的経験主義は、彼の裡で自然神学や倫理的合理主義への批判を倍加し、懐疑論へ導いた。カントへ大きな影響を与えたが、カントはヒュームの姿勢を批判するようになった。



### 十三 コント

今度は、オーギュスト・コントを多く語らなければなりません。というのも彼は、プラトンと反対であるにも拘わらず、殆ど同じ感情を私に抱かせたからです。それは私がパリに戻って来てからのことでした。私の机上には、自分が読むために六巻の『実証哲学講義』と四巻の『実証政治体系』がありました。これらの十巻の本を私は擦り切れる程熱心に読みましたが、今でも記憶が蘇って来ます。私はこの巨匠とプルドンを比較しても決して理解出来ませんでした。プルドンも沢山読みました。そうです、沢山読みましたが、何時も苛立ちと不安を持ちました。「所有とは窃盗である」という大変に物議を醸した言葉は、私を恐ろしくさせます。でも私は、大変遠い将来に及ぶかもしれない〈革命〉の見通しによって、恐れているのでは全くありません。何故なら正確に言うと、所有は労働と結びついた要素によっているものであり、窃盗は労働の無い獲得であると定義出来ますし、所有と窃盗という二つの言葉がその様に厚かましくも歪曲されて一つに結びつけられているのが私には分かるからです。又、恐らく私は、図書館や百科全書から引っ張って来ている文章にも不信を抱いておりました。それは語源学と歴史的叙述で創られているものです。私は、プルドンと彼を愛好する者たちの精神は間違っている、と見做さない訳にはいかないことを敢えて言います。それでも何という才能でしょう。あらゆる点において少なくともオーギュスト・コントはプルドンを押し潰し、小学校程度のものへ送り込んで仕舞います。プルドンは大変に良く読まれて、コントはこんなにも読まれないのは不公平であり、私は忘れることが出来ませんでした。

コントはサン・シモン主義者に近いと見られていますが、それはもう一つの不公平になっています。私は、コントの中にその痕跡を決して見ません。分配のための社会主義は、今見ている結果のように十九世紀の怪しい発明品でしたし、コントにはそういうものは全くありません。そして結局のところ、何度も行われようとされたことですが、臆面も無くテキストに反しています。コントをコント自身から分離することが、更に私の癩に障ったことです。そして私に言わせれば、急進主義がこんなにも軽蔑されているのも同じ原因から来ているのです。復古的でなく、聖職者至上主義でもなく、帝国主義でなく、社会主義でもない政治という唯一の概念が、真空の結果を生み出します。全てはそこに戻りますが、誰もそれを望んでいません。ところがそれは、コントの場合には真剣でした。理工科学学校の学問や、私が何処にも比類を見ない教養に、基礎が置かれていました。そしてこの美しい体系は、敢然として〈神〉の下や神々の水準に移っていました。少しでも道を譲れば、希望は最早ありませんでした。それは緊急で逼迫していました。そうです、〈人間性〉を見ていたのです。中心メンバーは至る所で養成されていました。コントが純粋な文学者と呼んでいた人々には、大きな恐れがあったのだろうと私は推測しています。従って栄光は直ぐに生まれて、ヘーゲルの栄光と比肩できると言われていました。というのもそのエリートは当時、学派を作り始めていたからですが、あっという間に崩壊することになりました。その点で実証主義学派の人々には殆ど思考する気力もなくなっています。これらの正直な人々は、私に腕を差し伸べて来ました。しかし、私は学派を恐れます。

これからは私がコントに負っていることを言わなければなりません。コントからは、ぴったり

と合って完全に適応させる思想は無いと私は理解しているのですが、思想そのものによって豊かで現実的になります。そして内面的に、外部からの気兼ねなしに深く思想を掘り下げることが出来るのです。人が陽の光を再び見る時は、大変に時宜に適っていて、時代より進んでいることさえあります。この不思議な状況は絶えず私の気持ちを堅固にしました。それでは、コントとは何でしょうか。

先ず、私に歴史を暴いてくれた〈人間性〉の話をします。それを見付けたのはヘーゲルよりもモンテスキューのものの方が多く、同様に美しかったのですが、そのことを私が知ったのはもっと後でした。モンテスキューの方が多いいと言っても、私の気に入るものが多くあったのではありません。そうではなくて、厳密で大地に足がついていて、恐らく人間の歴史そのものの完全な方向付けをしているということです。というのも私はヘーゲルに、終焉して欲しくない一種の〈中世〉を感じるからです。その代わりにコントは大胆に創意工夫して、自分の前で全過去を回転させています。その歴史の中で先ず私にとって明らかにするものは、宗教の過去と未来でした。何故なら私は、宗教が思想と同時に全て生まれるのを理解したからです。そして私たちの全ての概念は、例外なく先ず神学的であるという考えを、全く新しい定理として私は認めたからです。こう言って良ければ、それは正鵠を射ていました。それらの神学的なものが如何なるものであっても、私たちは思考を発展させることにより、当初の認識は人間や人間社会がまるで難解で曖昧でしたが、その人間が当初抱いた観念を、半透明な場所から抜け出さなければなりませんでした。そして、そこを通して世界を見るのです。そこから精神と社会は至る所にあります。星々や小石や水や畑や収穫に身を置いた社会の法則があります。物神崇拜は、私たちの全思想の幼年期です。続いて又、それは如何なる発見になるのでしょうか。多神教は一つの試みです。それは多くの小さな神々の間に秩序を回復させるために、明らかに体系的なものです。多神教は既に力の分類であり、自然の最初の秩序です。一神教に関しては、その次に文明の先端を切って課せられましたが、抵抗が無くもありませんでした。それは既に形而上学的精神です。内容も無く推論する精神です。全てが空虚で、独自の法則を社会や自然に課する精神です。それは物神崇拜の学派でしかありません。しかし、私が最も驚かされたのは、この一神教が純粹でありたかった体系から不純物を攻撃する抽象的で破壊的な批判を発していたことを、直ぐに理解したことです。そして神は決して十分に首尾一貫していませんでした。そこからは二つの帰結が認められます。一つ目は、不変の法則や純粹理性に変わったことです。これは科学の前兆を示していましたが、何時もその底には神学的原則に導かれていて、急いで科学を否認します。二つ目の帰結は、一神教は確かに抽象的な独断論や否定に基礎を置いた残虐な政治に導くに違いありませんし、実際に導きました。それが〈フランス革命〉でした。実証的時代が、その前の二つの時代、つまり神学的時代と形而上学的時代から見ると、全く経験的な科学と現実的な政治と、何時もあった宗教を名付けただけの人間の宗教によって定義されるのは難しくありませんでした。以上の観念は、最も大胆な人々にも、最も臆病な人々にも、同じ様に相応しいと私には思えます。でも、これらの分析から発見されるのは倍加する美と不変の洞察力であるということを私はここで言うことが出来ません。中世の観念はまさしく有名です。しかし、ギリシア世界やローマ世界のものも同様に有名でなければなりません。私は単に、コントの聖母マリアへの民衆崇拜についての指摘を述べるだけにします。ここでコントが認めているのは、物神崇拜はその野心的な後継者たちよりもより真

実に近く、私たち人類の残酷さと抽象的な時代に照応する一神教の単純化に、ここで激しく抵抗していることです。

この様に宗教、政治、風習、家族、産業という全ての歴史が素描されます。科学の歴史は、そこから生きた知識を受け取ります。数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学という順列よりも最善のものは作れないでしょう。この順序は抽象から具象へ赴くものです。この順序に従って様々な科学が、物神崇拜と神学と形而上学から解放されて来たのでもあります。コントの時代の物理学は未だ形而上学です。生物学は完全に神学です。社会学はやっと誕生したばかりです。コントが社会学を創り出して命名しました。

それと同時に、順列の論理学である新しい論理学が現れました。私の考えでは、それは数学が十分に示したように、精神の未来を開けています。そして私がここで言わなければならないことは、だんだんと教育の実践において論争的な推論に代えるようになって行ったことです。それは一つの完全な順列に従い、そして先行するものから後のものの説明が可能となります。その逆も同様で、十分可能な依存の順序に従って問題の諸項を整理する方法です。時々又、コントが中世について示していたように、中間項の妥協点が両端の予見的究明による以外に決定され得ないようなこともあります。この種の豊かさは、良き生徒であって、コントを良く読みたいと思う者には着実に示されることを私は言って置きます。この哲学者は、明示的表現者（アリストテレス、カント、ヘーゲル）と命名しなければならない者の一人です。殆ど全てを見抜いて知らなければならないプラトンやデカルトと比べれば、少なくとも読むことはしなければなりません。どちらが卓越しているのでしょうか。それは気持ち次第です。彼らは精神の四季なのです。

コントに私を夢中にさせるものは、充実した教義です。全てが歴史と理性に基礎が置かれています。例えば、権力の分離が私たちには正しく理解出来ませんが、それは形而上学時代に固有な偏見が原因になっているからです。しかし、その観念は如何なるものでしょうか。それは英雄的時代の教皇政治と同じ観念です。つまりそれは教皇の世上権を絶対的に分離させた精神的権力による観念です。精神的権力が堅固な理性を欠いている限り、成功が覚束ない企てはこの世上権に支援を求めました。しかしその観念は、実証的時代に全ての力を取り戻します。そこでの精神的力は十分に照らされて、力によるあらゆる救いを拒絶して、ついには国王と釣り合った世論を創るために啓蒙します。このような将来が創り出され始めます。その精神的力は、国王から給付されることのない学者たちの周りに女性やプロレタリアたちを集めるという観念になりますが、中身が無い観念ではありません。それは決して実現されなくても、大いに望まれているものであるのは明白です。そして新聞の現状から言われていることは、自由で見識のある世論が何時も脅威的な力による熱狂に対して十分な力になることを良く理解させてくれています。人間の教師たちは、最早多少なりとも国家から給付されないという思想が、恐らく読者を生き生きとさせる命題の一つになると言うべきです。何故なら、コントが少なくとも私的な援助金で生活することを望んでいて、生涯貧乏だったことは分かっているからです。しかし待つて下さい。お金に関するこの思想は、全くの貧乏人の世界では少しも重大なことではないでしょう。更に、お金による結び付きは、精神による行動も最小に麻痺させるので、国家の最も厳格な改革者たちも改革が何も失うことがないように最も注意しているのを、私たちは明白に理解しています。そこから私たち

の判断力の厳しさが生まれて来るのです。

これまで述べてお分かりのように、全く新しくしかも認められないこの観念の奔流は、私を未来の只中に押し流しましてたが、常に地上にいて、ユートピアへの希望も崇拜もありませんでした。私は何時もそこにいます。では、例えば社会学は叩かれたように茫然自失になって、何故目録の中に消えているのでしょうか。物神崇拜がその誕生期には私たちの全思想の自然な形式であるという根幹的な観念は、実際には茫然自失している物神崇拜者の思想が私たちとは絶対的に関係ないという相反する偏見に基づいて押し潰されているかのようなからです。そこから諸宗教へ行って長い間私を驚かせた一連の不条理を生んでいるのです。それはパスカルが望んだことですが、全く不可解なものとしてのカトリック教を身に付けることなのです。そして人は心に言います、「私たちはそこから遙か遠くにいる」。私たちが未だそこにいなかったことを、ついに私も理解しました。しかし私は眠りから全てを揺り起こすために、コントの次にヘーゲルを必要としました。これら二人の力強い詩人は、偶像に対する根本的な信仰心を全て私に返して貰わなければなりません。今お話している当時の私は、未だ形而上学の煉獄を引き起こしていたと思います。しかし、コントが熱心に詩を読むことで身に付けた習慣から、私は知ることが多くありました。又それは、私が古今の詩人たちに立ち戻る原因の一つでもあります。しかしながら、明らかに形而上学的事柄である教育から分離することが私には妨げになりました。そして戦争が近付くと、男子生徒や女子生徒の人数や問題の難しさに、私は惨めな状態に陥ったことも言わなければなりません。その頃は殆ど毎晩辞職のことを考えていました。しかし何時も翌日の朝にはその日の希望を何とか持つようにしていました。さてこの次には、兎にも角にも当時私が教えていたことを述べなければなりません。（完）

## 十四 暗中模索

精神の働きについてのあらゆる考察は、この働きそのものに関係しているのは明白です。それは決して疑いが生じないものと理解しています。従って、あるが儘の科学は哲学に主要な対象を提供します。それは確かに精選された対象です。地質学と天文学の教職にあったカントは、先ず証明された知識を前提としているこの種の思索の模範を残しました。その上、ライプニッツとデカルトも尊敬すべき規範であり、実際に尊敬されています。ところで私が既に指摘したように、数学者たちは彼らが手がけてその背後で身を守っていた高度な難問を濫用して、極めて強力で抗い難い影響力をふるい始めていました。その後で、物理学者たちが更にもっと酷く影響力をふるうに違いありません。要するに、当時は哲学者の間に恐怖が支配していました。そして最も大胆な連中も、最新の発見の後を追って、そして直ぐに熱くなって哲学することを単に誓っていたのです。それは抽象的な饒舌しか導くことが出来ませんでした。何故なら新しい理論は、誰も十分にそれらを知ることが出来ませんし、常にそこに発見する無効となった部分を見抜くことも出来ないからです。そして哲学者の仕事は、その時軽業師のものと似ています。私としては全く反対に、熟考を身に入れることが出来るのは、何回もの体験と古代の発見以外にないと確信していました。そして私はカントやライプニッツやデカルトや既にプラトンにおいても気付いていたのですが、最も単純な事例は最も複合的なものに劣らず不可解であったことです。私は自らの方法で数世紀も前から知られていたことを再び創造することを絶えず行っていたと言えます。それは直線、三角形、車輪、滑車、梃子、釘をよく調べて、単に結果を確認する経験だけに満足しないで、それらの理由を発見するものでした。私はこの仕事については『対話』に書いてありますから、ここでは詳しく述べることはしません。その時には全く知られていなかった形式の発見に一度私を導いた精神の冒険を、単に報告したいだけです。水とか空気の中で移動させなければならぬ固体に与えられる形が、問題なのです。私がある点について考えるようになって行った時代には、固体が切れるように、水も空気も切れると考えられていました。パリ・リヨン・地中海線の機関車にも前方に風切りがありました。今日ではご存知のように、風切りは後方になければなりません。後方が細い尾のような形をしていて、前方は反対に丸い形をしていて最も大きく広がっています。全ての飛行機や自動車の縦断面も、実験によって発見された形であるこの法則で造られています。

かなり逆説的なこれらの関係に人々が気付くずっと前に（私はその頃、田舎や海岸にいたりしていました）、私は魚の形に注目していました。釣り船の形も、魚の形に劣らず殆ど自然な形をしています。燕の頭が丸いのも、私には驚きでした。新聞で読んだのですが、針を何本も飲み込んだ子供が、色々な処の皮膚から針を回収したところ、常に太った方を前にして止まっていたとのことでした。絶えず流動する半流体の中における全圧力が針の表面全体に加わると、進行しながら太い方が前方になるに違いないと直ぐに私は明白に分かりました。それは太った針の先に油を付けて握り締めても同様に指の間で感じられるように思います。針の逃げる方向が、良く分かります。私は、斜面の解析法によって、表面上常に自然と仮定される圧力を基礎力学に従い分析しながら、既にこの結論を吟味していました。私は、これらの力の分解によって帆や風車を

良く分析していましたが、何の困難も与えませんでした。

こうした訳で、使用する際には全く反対の結論に、いわば私を慣らすために様々な例を考察しました。私は、太った頑丈な男が群衆を通過して家族を案内しているのを想像しました。確かに、列の後方に行く彼を見ませんし、先頭を一番小さな子が行くのも見ませんでした。全く反対に、いったん太った男が群衆に穴を開けると、後方が細くなった尾の形になって航跡を残して行きます。彼の妻から子供たちへだんだんと小さくなって抵抗もなく、すり抜けて行くことが出来ます。しかし固体の模型の話に戻ると、私はもっと適切なものを発見しました。それは後流を閉じ込めて置く流体が逆流しており、止まるのではなくて少し反対に押す力になっていました。かくして後方が尖った形は、幾らか速度を回復させていたのです。

最後に私は、変形する物体とか、石鹼の塊とかを水の中で引いて行くのを想像しました。それは先頭が、点にも刃の形にもならないことが私には良く分かりました。寧ろ丸くて広い面積のものになり、後方が細くなります。私は一度も実験しませんでした。でも、この例や多くの例から、私はあらゆる実験の原則を引き出しました。それは観察を、可能な限り長くして変化を付けて、実験の試みを可能な限り遅らせなければならないことです。これは新しい観念です。そしてそれを試みて下さい。何故なら、私は厳密にはそれを証明出来ないからです。そして正確に話すと、それは理性による教訓の一つでしかないのです。

何が起きたのでしょうか。私は船やその他の砲弾の未来の断面図を描いた手紙を、信頼の置ける友人に書くことが出来たことです。彼は、その手紙を今でも持っています。彼は一度活発に口論して私に証拠を与えましたが、大した結果にはなりません。結構なことです。というのも人は得意になる度に、直ぐに愚かになるからです。私は、その理工科学学校卒業者で予備砲兵が彼らの持っている語調で、次のように私に言うのを聞きました。「あなたは素晴らしい。あなたほどの独学者はいない。砲兵たちは可能な形を全て試みなかった、とあなたはお考えですね」。それでもやはり、大戦中に遠慮がちに後方を細くしたデサルー砲弾が使われるのを私は見ましたが、九十年型で射程距離を約千メートル直ぐに延ばしました。私がここに書くことを信じて貰えるか貰えないかは、どうでも構いません。数学者や物理学者たちの嘲笑の全てを損傷することなく通り抜けた自信が何故私の中に持てたのかを、私は単に理解して欲しいのです。ですから私は、教育の部分にこの困難を見出さませんでした。私は仮説の理念と類推の理念を、遙か遠くへ押し進めました。それは堅固な発展でした。それを生徒たちは利用することを覚えました。

ついでに他の理念にも触れて置きたいと思います。それは流行しているもので、強力で月並みな思想を男女の生徒たちに与えていました。私がコントによって知った社会学のことです。私は厳密な分析による方法を個別の事例に適用出来なかったので、輝かしい修辞学に従ってそれを展開しました。そして、それは私の授業を聴講する生徒たちの年齢には適していました。従って彼らは、社会的に上手に思考することを覚えました。それ以上のものも見出しました。或る者たちは、コントの名前を言わない方がもっと適切で上手く行く、と私に言っていました。ソルボンヌは何時も滑稽でした。

これらの発展と著者たちの研究は、強固な基礎を私に与えました。しかしそこから出発して、私は殆ど抜け出せない困難の中に飛び込みました。最も勇気ある連中も、殆どついて来ませんでした。私はデカルトの中に〈神〉に関する三つの証拠の解釈を挙げます。ずっと後になって結局

私は、デカルトと共に歩まなければなりませんでしたが、それは私がこれから言うように、英雄的な真実の裡に決断することによります。当時の私は『省察』にどっぷり漬かっていて、そこから抜け出せませんでした。私はラニョーに助けを求めて、そして思い出しました。これが本当に最悪でした。何故なら私はその時、尊敬の気持ちによって曖昧になっていたからです。しかしながら、尊敬を教えることには何かがあります。多くの私の生徒の中で最も優秀な連中は、私自身よりもラニョーの弟子になって仕舞いました。これ程私の心を打ったことはありませんでした。

私が孤独を感じたもう一つの問題は、〈時間〉の観念を説明することでした。私の後ろ盾にはカントがおりました。しかし、私は不可能なことを望んでいました。時間そのものを言うことは、全てが的を外れています。そのことは現在を超えて時間を流れさせているのですが、それはイメージでしかありません。というのも実際の時間は、不斷に流れる経過を、創り出すと同時に消えて行くからです。ところがカントは、時間の中に一本の線を引いて思考するので、空間的イメージを助けにしております。線は引かれていますから、その引かれた線は未来ではないのに、カントは未来を思考しているのです。同様に、連続した数字は比喩としての時間でしかありません。それ故に、純粋な時間を思考しようとする、私は対象を失いました。それは余りに陰鬱な冬の朝でした。私は取り除かなければならなかったのでしょうか。私には出来ることでした。でも、私は一度も望まなかったのです。その後、私がアインシュタインに反対しようとした一種の論争に、この研究の足跡が残されています。大戦後の『プロポ集』にも、その足跡を止めています。それらの思想は、更に成熟させる必要がありました。

私は、絶えず私の前に押し進めて行った二つの観念を、これからは利用しよう。しかし、それらは一歩ずつ勝利を収めながら、報いも見ていました。一つ目の観念は、精神と肉体の同じ境界地域に位置する〈想像力〉という観念です。二つ目は、精神の一番奥深い処に隠されている〈信仰〉という観念です。

想像力について私は、修業時代から既に支えにして来ました。それを知覚同様に見出しました。つまり立体感や透視図、あるいは稀に平面の形においても見出しました。というのも長方形の直角を認識させてくれる辺の長さの比較は、言葉とは別のものの中で成り立っていると私には思われたからです。そして想像力の働きは、形から形へ駆けて行くように思われました。又、この働きは実際何時も崩壊して何も存在なくなる空間を次々に作り出しているように見えることさえありました。要するに距離というものは、それが如何に把握されても、想像上のものです。そこから出発して私は、勿論何度となく迷わなければなりませんでしたが。その時に私は、想像力の虚無を知るような非常に恐ろしいものに出会ったのです。殆ど想像力の本質と言うようなものでした。何故なら非存在は無であるからです。従って私はより豊穡でより実質的な想像力、つまり思い出や夢や発明家のものに戻っていました。しかし果実の中には、虫がいたのです。しかしながら実際の深淵から私を引き揚げて行った想像力が、そのイメージの中には何もなく、落下する恐怖に帰する以上、イメージで思考することはイメージでしかないのでしょうか。観念を追い求めて行くのは困難でした。全てがそれを拒絶しました。取分け生徒も読者も知っていた事例ですが、月は天頂点にあるよりも地平線にある方が大きく見えることです。想像力はここでは現実に基づいて捉えられており、その誇張された大きさは見た目には同じでなくなるのです。し

かし、それは人が結果を見て、断片的に判断を下す通俗的教義であるからでしょうか。聴講者も読者も私のこの話を全て正しいと受入れるのは事実ですが、別のことも考えようと思います。そしてお分かりのように、私はもう一度ここで言い直すのですが、今度は地平線の月の想像上の大きさとは何であるのか人は理解するようになるだろうと言います。それは何ものでもないのです。それでは何なのでしょう。人間の肉体の中の何処に想像力があるのかを探求しなければなりません。そしてその時、想像力は極めて現実的になります。私たちにその深淵の中空を見させる眩暈が、実際には極めて現実的であるように現実的です。又、立体鏡の立体感も単に危険な固体を前にした一種の恐怖に過ぎず、結局は屋根の上の大きな月も、実際に私たちの肉体の中に全て閉じ込められたまさに激しい驚き以外のものであってはなりません。

良くお分かりのように、版画のように見れば大変に容易ですが、記憶の研究はこの観念によって大変に難しくなりました。思い出が対象にならないとしても、少なくとも私たちの肉体の物真似とか身震いであることを皆が否定するからです。その時の必要性によって、実際の対象の認識である完全な記憶、例えばドアとか階段とか顔とかを拠り所に行っているのは本当です。しかし何という気に障る新しさでしょうか。私は何も出来ませんでした。しかし幸いなことに私はあらゆる妥協を拒絶しました。そして、殊の外素晴らしく立派な身なりの聴衆を圧倒しました。この観念は私が教えたものの中で、多分最も実り豊かなものです。それは『芸術論集』においてお分かりになるとと思いますが、そこから全てが齎されます。しかし、私が話をしている時代は『判断力批判』に関する芸術しか研究していませんでした。そしてカントによる美や崇高の教義は、沈黙考する価値があるように思われましたけれども、私は何も受け入れませんでした。そうして大戦まで私は寺院、彫刻、絵画、歌曲、詩歌に存するもう一つの現実的な想像力の観念を思考することはありませんでした。私は真実の中に閉じ込められた儘でいました。私が追求していた不毛の観念は多くのことを約束していましたが、何も知らずにいたことを今は只言いたいと思います。しかしその度に私は、パイプを銜えてひげのある人間にしろ犬にしろ、木の葉の中に顔を観察していたのです。雲の中とか壁掛けの模様の中も同様でした。私が大変良く見出した錯覚は少しもイマージュを変えず、それ以外は語らず決して欺かない明確な対象全体以外に最早何も見ないということを私は確保しようとしていました。そこから私は、見間違ふことの見事な表現の意味を突然に理解しました。（完）



## 十五 信仰

もう一つの観念は、先程の観念と無関係ではありません。何故なら、自分を欺く人間は無気力でもないからです。彼は勇気があり、危険を冒します。その中で彼は自分を欺くのです。懷疑論者たちが良く言っていたように、判断することは危険な機能です。しかし、認識する者たちは大胆です。そして精神も、考えられるあらゆる勇気を望んでいます。私は、暴君とか厳しい尋問に公然と反抗する勇気のことを言っているわけではありません。この広大な宇宙にも、実在しそうな多くの慣習にも、圧倒されないで残っている勇気を要求しているのです。それは光が生まれるように、あらゆる雲を突き破ろうと努めます。そして独りきりで、精神力と呼ばれているもので、ヘーゲルが言うようにそれはランプの下で徹夜して、夜を昼にして行われます。しかしながらこの比喩は、精神によって精神を絶えず訓練する人間の悪意でばらばらになっています。その点で言うなら、精神の勇気を潰すものを精神と呼んでいるのです。この皮肉には、精神というものは空しいと認めて仕舞う奇妙な側面があります。ところで何時も皮肉に取り囲まれる野心的な精神の間で冷やかしか好きの人々は、私の勇気が失われるのを待ち望んでいるとしか見えませんでしたので、私は彼らと接触する時は必ず呼吸を整えて、先ず素っ裸の精神による勇気を示しました。そのことにより、どんなに学識があつて重鎮である人も、私から勇気を取り除こうとしているのに気付いた時には、直ぐに私の思考から消されていました。私はその判断をやり直すことはありません。その様なものこそ、人から恐れられる楽観主義の真実の本質です。私は、この種の覚悟が最初からあったので、先ず述べたかったのです。勇気に関しては比類なき先生であるラニョーは、私が感じたところでは一つの名前を言っただけでした。デカルトがその人物であると私は少なくとも覚えていましたし、今でも先生の中の先生です。

ですから私は、少しも秤を作るように勧められませんでした。そんなことは自説を秤に載せて、針を見詰めることです。それは一つの結果であつて欲しいと思うことしか私は決して信じませんでした。私に言わせれば、それは反対に一つの始まりです。要するに目覚めであり、あらゆる思考の始まりです。そして屢々非常に子供っぽくて脆い私の最初の思考における大胆な一撃が、明白に理解して何かを始める方法であつたことを私は何時も経験しました。この観念はあらゆる人の裡にありながら、最初に殺されるものの一つであると私は推測します。それは、事物にしろ人間にしろ私たちに謙遜の気持ちを教えるのですが、屢々辛い目に遭うことで教えられます。この謙遜は、傷付けられた自尊心でしかありません。私としては、私たちを偉大にすることしか望まなかつた一人の思想家を知つたのは幸福でした。そして私は、教義と関係した何千本もの紐を突然に切り、そして先ずは十分足るものとして教義そのものに教えられた一種の暴力を、彼の才能の中で大変良く見分けました。「存在するのか、存在しないのか、自己及び全てのものを選択しなければならぬ」。この崇高な思想は、無から生まれました。正確には、極端な窮乏から生まれました。そして、反論も反駁も極端な窮乏です。最初の思考も、二番目の思考も同じであり、全ての思考であることを私はついに知つたのです。

それは十分にデカルトを理解すること以外にありませんでした。デカルトはその点に関して全てを英雄的頑固さをもって言いましたが、誰も彼について行く勇気がなかつたということです。

しかしラニョーは、判断力における意志に関するあの議論について、見かけを克服することを覚ええました。「スピノザの形式は正しいが、デカルトは内容が正しい」。この極めて簡潔な言葉は、今でもトランペットの音のように私の中で鳴り響いています。私は自分に言います、「全ての困難はお前に勇気が無いことからやって来る」。誠に人は虚空の中を突進するようなものです。

私は仕事上も必要でしたので、デカルトを繰り返し何回も読みました。その度に少し高められて行きました。でも、再び降下しました。必然性は私には重苦しく思われました。事物の必然性を人は十分に受入れます。しかし、観念の必然性は透明になっていて、既に勇気ある場所がより少なくなって、取り残された儘になっているように私には思えました。何故なら、この高次の必然性を知覚するには勇気と意志がなければならない、と私は些か苦勞しても良く理解したからです。しかしその必然性は勇気ある命令によって齎されます。それがなければ何ものでもなかったことを私は殆ど支持出来ないように思われました。けれども、所謂永遠の真理は決して神を妨げない、とデカルトは言いました。この〈神〉は、デカルト自身の裡にあったと私は良く理解しました。というのも、他にどんな風に理解すれば良いのでしょうか。でも、その頃の私はデカルトを理解出来ませんでした。真理そのものに攻撃しながら、そこから逃げ出しました。そしてプラトンが、実際には少しも真理ではないあの健全な自説の見解によって私を助けてくれました。幾つかの例を元にするなら、偉大な天才たちは永遠の真理も解体する術を知っていると私は推測するに至りました。何故なら天才たちは、それらの真理を仮定的条件に依存させるまでに至るからです。愚か者にとって原子は一つの事実です。知性的人々にとっては、一つの観念です。偉大な天才たちの眼から見れば、それは暗黙の約束でしかありません。そうです。原子の内部構造に関して、これからは考慮に入れないということが取り決められます。それを切ることが出来ないと言うのではなくて、それを切らないことが誓われるのです。数字は、決して存在しないのであり、数字を思考するのを望む度毎に作らなければならないことを、カントが如何にして私に教えたのか、それはご理解されたことと思います。十二の後に十三を創造する前に、最早私は慣れるに至りました。というのも十二本の棒に一本を加えるとすると、昔なら別のものを結びつけていたと私には見えたからです。しかし今では、この単純な一本は不可分の全体に加わって、十二の特性は直ぐに消えるようにさせるのを私は知りました。そして数字の正体も同じで、別に個であり、別に要素である十三に席を譲るのです。勿論、その様に理解するのですが、独りで作るのではないことを知りました。又、この世の全ての砂粒は、一つだけの数字を作らず、如何なる数列の数字も作らないと私は気付くようになりました。このことは私が期待しなければならなかった結論によって、私を無限数から解放してくれました。私はソクラテスに戻りました。二つの骨片は、あなたが一緒に結びつけると、二つになりません。でも、私の二つの骨片は遠く離れていて、私が望むように二つになります。私が二の後に三を常に見出して、一と二十の間にも同じ素数を見出すのも本当です。しかし、この秩序は少しも事実ではありません。それが作られる範囲でしか示されません。自然は数字を保存することが出来ません。自然はそれらの数字を失います。計算機は数字を隠したりしません。それは印の機械に過ぎません。そして、会計係は殆ど数字のことを思考しません。数えたい数字であるかどうか以外は考えません。拒絶する度毎に、数字としては無になります。如何なる数字も無い自然に、全てのものが再び降下します。ですから自然は創造の拒絶に他なりません。

教養ある人々にも少しも明かされていないこれらの数字は、疑義を追い払う如何なる証明も決して発見されないのが確かであるという点で奇妙です。いや寧ろ問題は、ラニョーが言ったように、普遍的懷疑論が真実であるという点まで懷疑を働かせることです。そして私はこの種の砂漠の中へ自ら進んで行った時、そのことに屢々気付いたように、この働きは力によるものであって、弱さによるものではないのです。何故なら、最も良く証明された問題が明白に理解されるにつれて、それらの効力は素早く全てを失うのが精神の一つの現実であるからです。ヴァレリーがこの方法で発見したのは、明白である以上に不可思議なことは何も無い、ということです。本当のところは確信のある思想も、ストア派が好んで述べた三重の力による同意がなければ、蒼ざめて血の気が失せたように見えます。善良な夫人たちのやり方が信用されるように、それらの証明も信用されたとしても、何故この同意が必要なのでしょう。全てがそれ故に迷信に再び落すのでしょうか。しかし私は、基本になる観念そのものの事例によって何回もその点について告げられました。というのも信仰の観念は、証明を持たないからです。従ってそれを再発見したり、表現したり、自分なりに書いたものに読もうとしても無駄です。それは生きていませんし、半ば消えた肖像画に過ぎません。私は信仰のために人が祈るのを理解します。神秘主義者が、過去に知ったように最早知ることが出来ないのを、屢々呪われていて罰せられていると思うことも私は理解します。ラニョーはその理由を知っていました。彼は理由を集めて、純粋な懷疑に作り直して、そこから意志へ突進しました。私はこの活動を見抜きます。私は、恐れてはいけないことを知っています。大地に座っている時に（クローデルが言う最も低い場所で、これ以上降りることが出来ない所）、人が望みさえすれば救いに大変近い所にいるのを知っています。少なくとも望まなければなりません。信仰は全て意志です。同様に、これらの冬の思索において、勇気を持たないでいる若者たちに、少しは彼らを手助けしたいことを時々言う術を知ったのですが、余り助けにはなりませんでした。何故なら私は、あなた方の身になって望むことが出来ないからです、と言いました。自分しか当てに出来ないと確信するのは大切です。ところで私が知った処では、最早知らないとの経験を味わったことが無い者たち（ソクラテスはどうして二足す二は四なのか、どうして一足す一は二と同じでないのか、最早分からないと言いました）つまり絶望しなかった者たちは、絶望を現すあの光を認識することが出来ません。それは明白そのものであり、真実です。

しかし、恐らく最もびっくりさせられることは、当時毎日が絶望でしたが、悲しくも不安ではなかったことです。私は自分自身に対して、地獄の苦しみを味わう人の顔を一度も見ませんでした。私は容易に自分を慰めました。私は不必要な出費を止めました。私は眠ることを覚えました。今でも眠ることを知っています。そして更に、その後もずっと後になって私は、半睡状態の一種の夢想を自分で作り出しました。それは蒼白い観念が自ら動き出して、私が望めば飛び上がることさえあるのが分かります。私は期待します。それらを混沌の儘にして置きます。私はそれらが解体されるのを見ますが、助けはありません。そして私は大変満足します。そうしたことから私は、困難なことは作るのではなくて解体することである、とヴァレリーに言いました。彼はそれを聞いて飛び上がり、煙草を指の間で回しながら、絶えず解体して行くのですが実は作り上げているのであるという話を私にしました。芸術家たちは上手に話したいと思うと、真の教

師になります。私としては、これらの思考の休息の後で、混沌の儘に全ての自由を置き去りにして、トランペットの音のように突然に目覚めました。それは大変に軍隊的で、迅速であり、筆が進むのと同じ速さで幾つもの要素の中から汲み取ります。そこでは言葉が浮動していて平然として、新しい結合が準備されているのが良く分かります。恐れないこと、仕事をする事、喜びを自分に与えること（というのも誰がそれを与えるのでしょうか）、どうにかこうにかでも話すことであり、あるいは書くことです。というのも全ての危険を負わなければならないからです。そして私は今では、言葉の一つ一つに全ての危険を負わなければならないことを知っています。しかしながら私は、自分の苦悩を語ることは如何なる方法でも出来ないと思います。苦悩というものは決して無いのです。寧ろ困難な時においては、その困難と共に増大して行くのは一種の無関心です。私には、幸福な人々を信用しないという重大な間違いがあります。演劇の音が私には聞こえます。悲劇の仮面が見えます。そして、パスカルに反対して不愉快な口論を行います。何故ならパスカルは絶えず神に力を与えたがっているからです。しかし何故でしょうか。何が良いのでしょうか。劇場では当然のこととして劇場の姿勢を保っていなければなりません。そうであれば劇場へ行くべきではありません。（完）

## 十六 自由

私の探求は従って殆どが証明することと、完全な無関心の間を漂っていたに違いなく、実際に本当に漂っていたのです。良くお分かりのことと思いますが、私は判断力における自由を論じながら、殆ど同じ自由を行動においても保持していました。何故なら私は、肉体の主人になるよりも観念の主人になる方が容易であるとは理解していないからです。不幸な人々は、自分を解放するの知らない観念によって苦しんでいるからです。彼ら自身がその観念を創っているのであり、創り直しているのです。彼らはそれを放って置きさえすれば良いのです。如何なる亡霊も、私たちの判断力無しで済ませることは出来ません。そうなのです。しかし私が観念の主人であると仮定するなら、生理学者が言うなら、私は神経とか筋肉や体液への何らかの変化によって主人になるのです。従って観念についての判断力という力以上に、肉体についての意志という力をより良く証明するものは何も無いのです。その様な経験によるなら、最早困難はありません（私は困難な側である観念の側から言っています）。私の肉体を自分の意志で動かすことが出来る、と信じることに最早困難はありません。そうして、泳ぐオデュッセウスは思索する英雄にまで高められます。私がおんなじ様になった時には、この果てしない世界を敢えて良く調べます。そこには運命が書かれていないことを私は始めから分かっていました。私たちがこれらのことを理解するに最も良い助けになるのは大洋です。人間のあらゆる感情から清められるのが、大変容易になります。捻れに捻れた姿の中に、人はついに慣性を見るのであり、他には何も見ません。そして、その世界が私たちには最早、怒ったり望みを持ったりしていないように見えるや否や、その時に運命は霧のように消えて行きます。何故なら私たちをその世界に隠したように見えたあの法則は、死すべき定理であり夢想であるからです。人間の仕事は全てが、精神そのものに還元されることにあります。かくして私たちの液体についての定理が、最も激しい嵐の海と同じ様に油を流したように静かな海にも、一様に適用するこの考察を私は何処までも伝えて行つたのです。ですから定理による必然性は、櫂や帆や舵で克服するものではないのです。この世の法則は慣性であり、果てしない観念であり、確かにデカルト的なもの以外ではありません。それは申し分なく魂と肉体を分離させた時に現れます。しかし、それは容易であると思つてはなりません。それらの薄暗い精神の人々は、神秘の性質のものを自ら認めます。彼らは尋問者の視線で支持します。しかし私は、今でも物理学者たちを何度でもからかうでしょう。

常に出来上がっている創造や事前に創られている未来を否定するようになる、この逆転された宇宙論的証明に近付くには、多くの方法があります。私に具合の良かった考察の一つは、潜るのを待つ潜水夫のように、精神とは世界の中に通路を探すべきではないというものです。何故なら精神は世界にあるものであり、私たちの固有の肉体がそのことを十分に証明しているからです。行動は、私がおんなじ様な場所で呼吸することから始められます。私はそれに従い信じなければならないだけです。そして斜行して潮の流れや風に逆らつて、ついにほ行きたい所へ行く船乗りのようです。しかしながら、慣性的世界における自由な人間のこの観念は、絶対的には形作れないものです。というのも空間と事物の無限性は、私たちの概念では理解出来ないからです。しかもそこから私は、何を求めるのでしょうか。自由の行為にならないことが、自由の証拠になるのでしょうか。ルヌヴィエールが言う術を知つていたように、人は必然的に自由になるのでしょうか。しかしそれでは実際には滑稽です。ですから、意志で行うことに戻

らなければなりません。正確に言うなら、意志で行うのを望むことに戻らなければなりません。更に、明日にはアメリカ的な何らかの証明が何時までも自発的な自由意志を殺すとか、反対に何時までも救うということを恐れる必要がないのを知るのは、常に正しいことです。

ここではカントの実践的教養を十分に理解しなければなりません。以下は私が如何にして取り組んだのかを述べます。私は、間違っ手に入れたお金を全て返さなければなりません。この間違いについては、たまたま私には全ての保証があったのです。このお金を持っていても、私が損害を与える人は誰もいません。又、ジャン・ヴァルジャンのように人を騙す決心をしても、大した騒ぎにはならないのです。こうしたことは全てが取り除かれて、私は何時も（というのも私はそこに落ち着くからです）あの阿片と同じものに辿り着きます。それは私が何も出来ないものであったり、又は本に書かれているように私が選んだりするとか、私の祖先の一人の頭脳に似せて創られたものとか、その種のものに従って選ぶようになるものです。でも、これは問題をはぐらかすものです。自分自身で自らの行動を観客になって目撃することです。ところがこの偏見が間違いそのもので、もっと適切に言うなら、一つの間違いの中に可能な全ての間違いがあるのは明らかです。そこから私が理解するのは、もし義務があるなら、それらの義務の最初にして主要なものは、私が自由を信じているということです。そして更に言うなら、人がそこで何も出来ないなら、それは全てがあり得べき間違いになります。もしも「ねばならない」とか「べきである」という言葉が正しい意味を持つなら、自由は疑いの余地がないものになります。そして私が観念によって自由を証明すること、そして自由が想像出来ようと出来まいと、少しも重要ではありません。恥ずべき決定論で最悪なことは、私が何時も怒って興奮して議論の中で見たようなものあり、それは決定論そのものが意志であり誓いであるということです。悪魔のようなこの姿勢を私は悪意と呼んだ日には、善意という意味も全て再発見しました。ご存知のように神学者たちによると、悪魔は自らの意志で地獄に落ちます。ここでも私は、神学が全て人間のものであることをもう一度発見しました。しかしもう一つの観念は、極めて悪賢くもあったが、平然とした夢を何年も望んでいました。でも、それはある決意によって突然にはっきりしましたが、直ぐに放って置かれます。戦争活動は、全くこの騎士的思想に適合していなければなりません。しかしながら一九一〇年頃の私は、そこまでデカルトの弟子になろうとは思っていませんでした。

少なくとも私は仕事によって、そしてカントが真面目な検討に値すると決断していたので、あらゆる方法で条件もなくこの義務に戻って行きました。それは平たく言うなら、信じることの義務、正確には自由に自ら信じることの義務に帰することでした。人間の行動の全詳細は、規則中の規則である「自由であれ」に古くから従属させられていたのです。それが極めて正確に言いたかったことは次のとおりです。「機械的理由、つまり習慣、見本、世評、利益によって操られる儘になってはならない。愛によっても同じで、幸福によっても同じである」。私がびっくりしたのは、カントが臆面もなくめちやくちやにされたことです。人々が、食べ物を入れる胃によってしか愛することを理解しなかったことです。それは既に、人間として愛することではありません。幸福な人は、と愛情深い人は言います。幸福な人は、自分の義務を果たすまで感動し同情する心を持っています。ルソーはティドロの中に、この平凡な教義を見抜いていました。でも、ルソー自身の裡は十分見抜いていませんでした。私は、カントがルソーに何を見つけたのか、何故雄弁の魅惑を打破するために何度もルソーを書き写したのかを、理解しました。それは自分に満足することが今は重要ではありません。寧ろ、普遍的判断に従って善と悪、義務と過失が、何であるかを大変正確に知ることです。そしてこの判断の形式を純化することです。つまりあるが儘の人間を、その人に示す方法であるその形式を純化することです。美德がその中で無になるあらゆる判断が、別のものになり得ないのを前提にされているのは本当です。そして別のものになり得る人が

、欲求や怒りの奴隷になっていないのです。ところで私たちは、欲求や怒りの代理人としての理性を何度見せられて来たことでしょうか。

ここで気付くのは、この道徳的教義と、確かに通俗的道德ですが通俗的道德の全てではない一般に教育された道徳を、一致させようとする時に身に覚える困惑です。その時に人は何か高次の動機を求めますが、それに従えば良く行為するようになるものです。その様な道徳は善に向かって歩みます。作品が人を裁き、皆が満足します。皆が満足するのは、人間は自らの命令によって行為することよりも自説を信用する方をより愛するからです。自説は、人が相談するや否や優しくなり、折り合いを付けてくれます。更にその上、困難なのはジャン・ヴァルジャンの場合です。それは彼しか審判者がなく、恐怖とか怠惰という大変に感覚的な重さを理性的な行為の中で、大変に良く識別する術を覚えます。「自由であれ」。そのことが多少なりとも明示しています。もしも善悪の規範を求めるなら、明示するものは最も少なくなります。というのも全ては、やり方によって悪いものになり得るからです。どんなに祝福されても、復讐や臆病による結果は、少しも善いものになりません。その人間の内部を見たなら、少しも善いものでないと判断されます。例えば私が偽証を行い、それと同時に暴君に気に入られ、非常に恐れられているやくざ者の世界を解放することが出来るとします。それは逃げることでしかありません。でも、逃げながらも、私は善を行うことが出来ます。それは善であって、義務ではありません。その様なことがこの教義のパラドックスです。何時も間違っって説明されているのを私は見ましたが、反対に著作者においては何と明晰で力強いことでしょうか。ここで書かれているのは、まさしく英雄です。恐らく存在することは出来ませんし、これからも決して存在しないでしょう。現実の円は、決して円になっていないのと同じです。原則とは実際の行動が従う曲線による直線の座標軸である、とレーニンが言っているのを私は最近読みました。稲妻のようにそれが私に呼び起こしたのは、人間の実際の状況は自由でなければならず、そのことを知っていて、そこから何時も生き生きとした不屈の信仰を見詰めることです。その他のことに関しては、泳ぐオデュッセウスのようにあちらこちらに運ばれて行きます。私のことに関しては、一種の誓いによって規範はないが、原則には欠けていないこの道徳を真実として自分に与えたいと望む度に、私は有名な三つの格言のうち最も美しいものを自分自身で唱えていました。「あなた自身においても、他人においても、常に人格を目的にせよ。決して手段であってはならない」。これが一番美しいものです。その他のものは、普遍的法則であるものに従って私たちを規定しようとしていました。ここでは不確実性が、原則そのものを打破する危険がありました。ところでそこで躊躇して、嘘をつくことが普遍的法則に昇格させられないかどうか探求することは、十分に許されています。つまり病人に嘘をつくとか、ジャン・ヴァルジャンに救いを約束することを私は理解しています。それは人が知っていること以上を、約束させられるものです。その中にラニョーの例に倣いながら、私は道徳の詳細を屢々父や友人や聴罪司祭に委ねていました。しかし、他人においても私同様に、自由であることの敬意に関して私は反対に、強い確信を持っていましたし、勇敢な立法者でした。

そして今では、私が到達しているこの研究の対象は自由そのものでしたが、カントから如何に助けられたか、お分かりになると思います。カントによれば自由は義務であり、現実の行為ではなかったのです。私は、自由の冷静な公準をその教義の中心から引き出しました。もしも「今、理解しているような道徳的判断は如何にして可能か」という疑問に答えたかったなら、全く厳格に自由を前提にしなければならぬ、と私は良く理解しました。しかし、私は理解する以上に上手く行いました。私は人間の呼びかけに答えました。そして誤ってばかりいながらも、何故ならそれが私たちの宿命であるからです。私自身についての力に決して疑問を持たないことを覚えました。私は全ての経験を通して（戦争ほど教訓的なものはありませんでした。）、誤りの中の誤りは、他者になることは出来ない機械のように

自分自身に受入れることである、と私は絶えず深く理解していました。そして、その底には盲目的信仰を批判するために飛び上がりながらの飛躍によって、何も出来ないこの激怒と決心するために憎むこの残酷な方法を一神教的怒りと名付けて私は気に入っていました。私は、プラトンやカントの人間論が如何に屢々動作や眼の輝きや手による引っ掻きでその時、地獄のような永遠なるものに適用されているかを理解して貫うために、敢えて危険が伴いますがこの例を挙げます。人間を洞察すること、あらゆる場合にも洞察することは、それ故に自分を信じている以上にその人間を捉えることです。私はジャン・ヴァルジャンと司教との美しい話に戻されます。

しかし、私の探求は終わりではありません。思い出されるように私は判断による自由、つまり最も内奥の貴重なものから出発したのです。私はそこに戻りました。そしてルヌヴィエの多くのパラドックスや、ラニョーの雲間を縦横に行き交う雷の閃光を幾本も明るみに引き出しました。何故なら、思考することにも十分に義務があると私は思っていたからです。思考することは、何でも構わないではありません。思考すること（重さを量ること）は、量る人の働きであり、天秤の働きではないのです。そして判断する時に、もしも私が只どちらに傾いているのかを見るだけでしたら、滑稽です。それでは臆病なのです。私はそれを裁判官自身の罪である、裁判拒否と呼ぶことにしました。そして自称先生方の中に、狂った天秤の事例が何と幾つもあることでしょう。本当に必然的なものが真実でなければ、何ものでもないのです。狂人は、例え真実を言っている時でさえ、それは真実になりません。従って狂人には最早真実がなかったのです。全てが最早、真実でなかったのです。その様なもの、あるいはその様に私たちを待っているものは、最早けっしてなかったのです（あるなら誓わなければなりません）。それは恐らく自分で示すものです。自分を示すものは、何一つとしてその愚かな天秤を数に数えませんでした。いいえ、そうではありません。もしも真実を思考したいなら、第一に、そして何時も当然あるべき様に自分の思想を導かなければなりません（目的としての人格を身に付けることであり、決して手段としての人格ではありません）。精神は、真実の手段になるべきではありません。そして精神は自由です。あるいはもっと正確に言うなら、自ら自由を望み、自ら自由を固く決心しているので、申し分なく思考するための規則は、人が望むように思考することにあります。これらの事例には事欠きません。例えばデカルトの歩みがここにあります。この著者の根底には、何時も独自の命令に従って思考したものが、決して経験に従ったものではないと私は信じています。直線は存在しません。私が直線を引くのは、私が望んでいるからです。そしてそれが純粹なのは、私が純粹であることを望んでいるからです。直線を引くことは弱点でもあります。直線は二つの星によって大変に美しいのです。精神が唯一それを支えています。その様にして観念の味は、自由を選択する以外の何ものでもなく、少なくとも審判者のような者に依存しないことを誓ったものです。数字はその様なものです。原子もエネルギーもその様なものです。それらのものは変わることも、歳を取ることも、経験によって皺だらけになることも許されておりません。従って、例えアンリ・ポワンカレが強く主張して私たちに信じさせようと、非常に便利であることを、例え天文学的三角形が与えていなくても、私はユークリッドの三角形を捨てないことを心に思いました。そしてポワンカレが主張したのも、自分で楽しむためであると私は考えています。この思想家は自由でした。しかし、仲間を決して尊敬しませんでした。恐らく彼は、仲間のことをお互いに知らなかったからでしょう。そしてここでも極めて直接的に狙いを定めて、あらゆる頁の中で言っていますが、プラグマティズムが心の一時的失神に関係しているに違いないと言ったのは彼自身です。以上の様に、天才とは最後に支払うべきものを全て支払っているのです。これだけの準備を全て整えた後で、単に私たちの思考の観客に止まって、人間の天秤を作ってみましょう。そして選択せずに思考してみましょう。でも、それは誰にも出来ません。何故なら誰にもはつきりと分かるように、思



考を始める時の関心事は何を思考するかではなくて、何を思考すべきか、であるからです。彼は武装して身を固めます。そして最初の結果は、デカルトが教えてくれたように、懐疑です。確かなことを疑うのです。疑わしいことを疑うではありません。それが精神です。獲得された全ての真実を捉え直すことであり、それらを先ず仮に否定することです。それらを否定することが出来て認識を導くのです。これをなすべきである、ということが最高の原則になります。そしてここに私は、プラトンの全作品と再会します。

ところで、それは大きな変化が起きます。正確に言えば、それは私が未だ見当もつかなかった革命です。最早、真理はないし、聖なるものも何もありません。尊敬すべきものとして与えられるものは、人が武器に走るように、先ず否定することです。そして壊しに壊すことです。再建は行われますが、それは人間である時です。以上がアナキズムと命名される理由ですが、それは教義の魂であり、そのことは誰しも分かっています。それ故に私は、最悪の暴君は理性を持った者であると時々考えました。ここまでお読み頂いた読者なら少しは推察されることと思いますが、恐怖と興奮は少しも思考の無い航跡の中に生じるのです。秩序の尊重者であろうとしたラニヨーは、或る冬の日、多くの闇を抱えていた後でしたけれども、絶対的に証明された思想、力尽くで精神を占領した思想、まるで事件であるかのような思想は、最早思想ではなく事物であると言っていました。又、別の日にラニヨーは、そのような意味で懐疑論が真実であるとも言っていました。何故ならそれは真実であるもの全てを、人は厳密に言って疑うことが出来るからです。この思想は、人間の思想史を照らして明らかにしています。というのも実際に、懐疑論者たちよりも堅固な思想家たちは殆どいなかったからです。彼らは獲得した貴重なものの上にいるかの如く、自らを確保していました。そして、もしも自由を確保していれば正しく、犬がやるように教義にしがみついているなら誤りでした。人間としての意欲によってモンテーニュは自分の懐疑に決して窮屈になっていません。寧ろ、明るく照らされています。彼以上に大胆にそして断固として、勇気や節制や正義や英知そのものを判断する人は最早おりません。そして私の見解では、その静かな自由は鋭敏で新鮮で少々凄みのあるその文体に表されています。

私は、断固たる自由に従って人間の友情に関して如何なる観念を抱いているか、何回も繰り返し言って来ましたので単に指摘するだけにします。狂信と不寛容は、まさしくヴォルテールもそこに見た精神の怪物です。しかしながら、観念の暴君や迫害者とは何であるかをヴォルテール以上に良く理解するならば、その人はヴォルテール以上に幸せになることが出来ます。私はこれらの存在を遠くから呪っていました。しかし近くからは私の兄弟たちを認めていましたし、彼らの熱狂は論拠によって導かれて感じていることから来ていたのを私は認めていました。そこから彼らは、城の銃眼へ駆け寄り、跳ね橋を閉じて、万一を見込んで石を投げました。強制されないでいる彼らは正しいのです。そして私は、彼らの心を捉えることが出来る友情の規則しか理解していません。それは他人の思想を何時も正直に思考する（恐れるな）ソクラテスの規則です。その様な議論の方法だけが自由な人間に相応しく、尊敬にも結びついているのです。そして、それは厳しい尋問も退けます。もしも革命家たちが断固とした行動を絶えずとり続けて、精神は快活な儘でいられたなら、私たちは既に幾つもの奇跡を見ていたでしょう。自由な人間は、意見の対立が革命の魂であることを知らなければなりません。（完）

## 十七 戦争

戦争の話に入ります。事件や逸話には触れずに置き、戦争が全ての人々に損害を与えた観念のドラマだけを考察したいと思います。それは私には激しく耐え難くもありました。死の歌が家々に鳴り響いた時から、私は血を知覚しました。恐怖と勇気の両方を一緒に知りました。そうして最初の数日は、私が自分だけの帝国を失った日々です。私は最早恐怖しかありませんでしたが、長続きする筈もありませんでした。幸いにも私が同時代の人々と同じ様に、旧兵役法と新兵役法のどちらかを選ばなければならなかった時も、そして私には永久に免除されていた大学の兵役志願を望んだ時も、私は戦争になれば隊列に復帰することを私自身で誓っていました。迷いはありませんでした。全ては体力が残っているかにかかっていた。かくして私は四六歳の時に、軍医の検診を受けて重砲兵になりました。重砲隊（九五ミリ砲）は軽砲隊にもなって、ウーヴルからシャンパーニュへ、ウーヴルからヴェルダンへも移動しましたが、その間は眼前に毎日危険が伴っていました。ところで私は三年間の軍隊生活で、二つの部隊を見ました。最後に私は、ここに残って軍務に没頭しようと考えていました。熟考する時間さえも無く、休息の時間には直ぐに深い眠りに襲われました。そこで私は仕事を覚えましたし、それと同時に絶望も癒えました。その後、四か月頃経って、私は奇妙な夢から目覚めて、私の慎重さによって自分を救うことが出来ると思い始めました。その時に私は思考することを再開したのですが、辛さはありませんでした。そうして私は、身を委ねていたこの恐ろしい権力の閃光しか感じませんでした。しかしその時から私は観察して、目撃者として思考しました。私は多くのことを学びました。プラトンは『国家』の中で、賢者は真の知識の中で迷う儘にして置いてはならず、仲間が残る洞窟の中で力を取り戻さなければならない、と言っています。私はこの観念に従って屢々考えましたが、あらゆる種類の理論家たちは彼らの年齢に応じて、何らかの命令を行使して遠くへ冒険に出掛けたりすることを生涯に何回も行うなら、多くのものを手に入れることでしょう。私も二六歳の時に、学生に与えられていた世界一周旅行の給費を申請した思い出があります。大変に賢明な大学当局は、私が今の地位で大いに役立っていることを理解させてくれました。その旅行は、役立っていなかった人々しか認めていなかったのです。私が少しも退屈していなかったのは本当です。しかしながら、大冒険の話が来て、都合良く私の心を大きく揺すぶったのです。そして幸いにも、それは決して私の年齢に適した命令になりませんでした。この様に私は、自己を保身したりしませんでした。私は迅速に聡明に働きました。そうして気付いたことの一つは、私が大変良く行えることを人々は何時も私に頼んでいたのです。ですから私は平然としていました。別のやり方で平然さを取り戻す方法などは、私には分かりません。私は束の間の不平や怒りは放って置きました。道徳的判断も放って置きました。そのことは全て書きましたし、そのことは余り考えたくありません。しかし、戦争で何を学んだのでしょうか。それが問題です。

私は命令を理解しました。何故なら私が所属していた上官たちは、屢々無知で怠け者でしたが、少なくとも命令する術は心得ていたからです。それが彼らの勉強であり、彼らの力であり、彼らの任務であることを私は理解しました。絶対的権利を行使すること、希望を奪うこと、犬のように彼らの怒りを放すこと、そして同時に覚えて察すること、沢山のことを知らずにいること、

多くのことを黙認すること、そして特に実行の場には余り近付かないことです。何故なら彼らの決断が鈍くなって仕舞うからです。これらの様々な悪知恵を、仕立て屋や料理人の給料計算や細々とした管理方法に結びつけて下さい。あなたは下級将校たちの考えが分かります。彼らにとって射撃の調整は、気晴らしに過ぎません。そして勇氣に関しては将校も一兵卒も、全員が不平等であったという意味においては全員が平等でした。称賛すべき感動も、恥ずべき動顛もありました。誰も自分を自慢しませんし、軽蔑もしないことになります。私は、それらの観察したことを全て書き留めて、信頼出来る人の手許に隠して置きました。こうして私が『マルス』を書き始めたのは、一九一五年の初め頃であると言っても間違った話ではありません。しかしながら、この著作についての私の記憶には依然として混乱があります。というのも、多くの章は戦後に書いたということを認めることが出来るからです。そうして戦争の喧噪と泥の中で書いて残したものを、その儘幾らかでも引用することは殆ど出来ませんでした。私はその多くを変えたり訂正したりしましたが、驚くことではありません。しかし訂正する方法は、何時も同じでした。書き足すか、多くは最初から再び書き始めて書き換えましたが、それは趣味と言うよりも寧ろ性分で、そういうものと自分でも当然と思っていることです。兎に角、冒険の後でも私が絶えず書いていたのは事実です。それが私の楽しみでした。

戦場で人間を見ると美しかったです。私は人間と呼ばれている者を理解しました。人間たちと呼ばれている者たちです。彼らは何も信じていませんでした。自分たちの仕事を行っていましたが、危険の中では更に一段と極めて綿密に行っていました。砲兵としての仕事は照準を合わせることです。一人ひとりに役割があります。最も恐ろしい場面になる時でさえも、怖がっている時間はありません。私は、より職人仕事である電話を特に覚えました。そして物理学の知識を持っていたために私は、親方になることもありました。電話線や装置の修理においては熟練者になりました。私は、当時存在していた全ての装置を知っていたと思います。驚く程に私は熱中しました。ところで物理学以前の私の勉強が輝かしく、素早く私の役に立った一例を次に書きたいと思います。

当初の各電話局は、地面に銃剣を立てて所謂アースを接地させていました。ところがアースに隣接する電話局が、そのアースから伝達されたのは一人の声ではなく、三人の声が聞こえてくるようなことが起きました。理工科学学校を卒業した専門家がやって来て、各電話局のアースをお互いにもっと遠くに離すように命じました。その状態から分かったのは、長時間の仕事と電話線を多く使用することばかりでした。時間が足りませんでした。勇敢で立派な實際家の下士官が私に言いました。どうすれば良いだろうか。私は少し考えて言いました、「全てのアースを一本の優れたものにまとめなければなりません。そうすれば、接地による混線はなくなるでしょう」。彼はびっくりしていました。ところが私が言ったように行いました。すると翌日からは混線は全てなくなりました。理工科学学校卒業生が言ったことを私は無視したのです。私が名付けたこの単一式アースは、至る所で急速に使われました。しかし注意して貰いたいのですが、単一式アースは都市の電話局なら何処にでもあったと電話局員なら言えたことでしょう。私は、ずっと以前から知られていたことを発見しただけでした。しかし、それで話は終わりませんでした。それから一年後に別の所で、私には全く見知らぬ理工科学学校卒業生が電話線装置を私に運ばせましたが、それは敷設の準備でした。彼は私に言いました、「当然、単一式アースだ。理由は分からないが、

それで上手く行く」。私は泥だらけの砲兵伍長でしたのに迂闊にも、理由なら大変良く分かっています、と言って仕舞いました。すると非常に侮辱的で、屈辱的に罵倒されて思い通りやられて仕舞いました。戦場では決して言い返してはいけません。直ぐに殺されるに違いありません。しかし、この情熱的哲学には驚いて下さい。

まあ、私は秘密の物理学を思い出し、全く合理的であることを認めました。電氣的伝達を、ポンプの圧力で送り出される水圧の伝達と比べながら私は、水を汲み出す水槽をアースと考えました。すると何本ものパイプで繋がっている幾つもの水槽は、ポンプの圧力が水圧の変化によってお互いに伝わって行くのが私にはかなり良く分かりました。ところが単一の水槽で、しかも大きければその影響は確実に弱くなるだろうと思いました。真実の推論がそうであるように、その推論もごちないものでした。こうして私は、理工科学学校卒業生たちに対して勇気を持つようになりました。

私は政治も知りましたが、終わりの無い思考の中で迷うばかりでした。私の戦友たちというのは、鉄工や木工の労働者たちとか、土方とか農民でした。彼らとは大変自由に臆面もなく何でも話しました。可能であるなら脱走するのも大変簡単であると思っていました。彼らはやはり勇敢ですが、注意深かったです。ところが私は、社会主義者の人間には一度も会いませんでした。私は何度も、全く高尚なことを良く思考しました。それで私はレイモン・ポワンカレ(1)を厳しく批判しました。でも、ジョゼフ・カイヨー(2)を評価しようとしていました。結局のところ私は相変わらず、急進的な自分の本領を發揮していました。そして他方では物理学の問題でも、戦術の問題でさえも、彼らにとっての権威者でした。それにも拘わらず私の全ての政治的発言は、非常に冷淡に受け取られていました。私は、秩序の維持と呼んでいたものに一度ならず触れたことを認めました。私は気付きましたが、彼らは実際の思想を何も変えないことを誓っていたのであり、彼らが自分に与えていた自由は戯れに過ぎませんでした。しかし私は、彼ら戦友たちがもっと奥深くそして自省しているのを理解しました。彼らは自分たちの自由を行使するのを良く望んでいましたが、もっと遠くへ引っ張って行くことは望んでいませんでした。議論でいくら勝っても、大変に空しいことを私が理解したのはこの時です。というのも人はその議論の時が来ても、只見るだけで、全ての門戸を閉じて仕舞うからです。それでも注目すべきことは、この不信には完全な信頼も伴っていたのです。私は屢々将校と、気晴らしのために一緒にいる時間をかなり長く過ごしました。それでも告げ口をしていると疑われることは一度もありませんでした。この種のことは何処にでもあることと考えられていました。

私と知り合いになった将校たちからの待遇は良かったです。良すぎる位でした。一番近づきになった将校は、頭は良かったのですが恐ろしく気難しい人間でした。私はこっそりと、プラトンとディオニュシオスの喜劇を演じていました。私は彼のことで不平を言う筋合いではなかったのですが、頑固で嫉妬深い権力に同意することは出来ませんでした。そんなことで冷たい霧のようなものが生まれましたが、彼は退屈して私の処へ戻って来ました。又、他方では仕事になると私は、将校たちから遠く離れて見ていました。例えば、チェスの勝負には誠心誠意に心を込めて行っている、一兵卒など絶対に勘定に入れない権力の濫用に私は何時も気付いていました。そして彼らとの関係は沢山計画したにもかかわらず、全て失敗しました。私は多分、厳しすぎた

のです。戦争という状況は、暴力的気分と人間性の忘却が必要なのです。しかし、命令の諸定理を私が発見するにつれて次第に精神が前もって殺戮されて行き、更にもっと醜い戦争を見ました。私は常にそこにおります。止まることが出来ないと感じる、まさにそこにおります。当時の私は、特に未来が恐ろしい程に困難なものに見えました。

それらの困難な関係も用心深さも、殆ど存在しなくなりました。戦争が軍隊の伝統に従って、命令で動くにつれて次第にそれらは重要でなくなって来ました。電話交換手たちも自分の仕事を覚えました。機械も最早、不可解なものを出さなくなりました。私は伍長でしたので、監視所と戦場を確認するために、電話線に沿って走り回る時間が与えられていました。お陰で例外的に、口うるさい上官に捕まることはありませんでした。それは穴の中に泊まる猟師のような生活でした。何時でも出発して、夜も昼も一年中戦場に住みながら、慎重で、時間を選び、露の時刻つまり戦争自体が眠っている時に電話線に伝って行き、兎や鶉を起こし、雑嚢には経理部から貰ったグリュイエール・チーズと鰯のオリーブ油漬けが入っています。私には、例えば下士官でしたが袖の金モールのことなど考えないで良い、得がたい友人がおりました。二人は良く班を時々引き連れて、電柱を立てたり、電話線を延ばしに行きましたが、何日もの間命令を一つも受けずに過ごしました。人間で一杯のこの戦場も、砂漠のように見えました。至る所に塹壕があり、そこから親しい顔や見知らぬ顔が覗いていました。私には、見知らぬ兵士が持っているものの全てを与えてくれますし、何回も塹壕の中でのいる場所を与えてくれたことは忘れられませんでした。その代わりに顔見知りの連中は、自分たちの権利とか相手の権利のことを考えているのです。君たちを食べさせなくてはいけない料理人は、ビーフステーキやフライドポテトまで見付けていましたが、交渉が必要です。見知らぬ料理人は、君たちをホメロス風に歓待してくれます。お礼はお話することです。私は、植民地軍の料理人を相手にして喜ばせて上げたお陰で、チーズやコーヒーや極上のブランデーも一杯飲ませて貰いました。彼は、料理人としての理屈で結論付けて言いました、「手に入るだろうよ」。私は彼に言いました、「では、手に入ったら人は何をするのですか」。彼はこの新しい文句を繰り返しながら、自分の両腿を叩いていました。一九三五年の今日でも、今なお新鮮に聞こえて来ます。

それらは兵隊の言葉でした。人は完全に兵隊になります。最早、窮屈になりません。最早、驚きません。人はその人間を見ます。常に勿体ぶっています。驚くべき観察者になり、大空と大地の全てを知り、トロイの攻囲戦のために十年間も船に乗っているのです。時々苦しくなり反抗的になりますが、ソーセージと葡萄酒で上機嫌に戻ります。何処にでも住み着き、可能となれば現地で生活します。私は時々、馬の御者の所へ材木を取りに行きましたが、彼らには感嘆しました。何時も鹿料理を頂戴しましたが、まるで彼らは鹿を飼って育てているかのようでした。ある時、軍司令部に小さな猪を持って行くことが流行りました。私たちの監視所に来た司令部の伝令たちは（一頭十フランで）申し込んでばかりいました。そして三時間後には二頭の小さな猪を連れて行きました。動物を連れた者たちが、部隊を取り巻いていました。子供の猪を連れて行かれた雌の猪のお決まりの怒りは、少なくとも問題にされませんでした。お分かりでしょうが、私はこの三年間で、人間の活動と真実と、同じ人間の魂胆を学びました。というのも自然との関係と、道具としての武器において、人間は地上の王であり、両足と両腕で支配しているのです。

人間が人間によって狩られるのは（それは私たちの状態でした）、少しも自然ではありません

。人間はそこでも他の所と同じ様に行使する巧みさを誇張します。人間は既に一種の雄弁術に罹りやすくなっていて、屢々動作や、時として無言や、不動に出ます。そこでは神々や人間たちを呪うことが見られます。勇気への回帰があれば美しいです。それは人間を超えた尊厳によるからです。しかしながら私は、こめかみや目の縁に絶望の色を出していない兵士を一度も見ませんでした。しかし、それが何でしょうか。人は全てのことに態度を決めています。人間と事物に締め付けられて、次のような格言を実践しながら仕事へ赴きます。「他人にとって良いことは、自分にとっても良いことである」。「何故他人であって、私ではないのか」。私は、まさに人物と呼ばれている人間たちの中に、仕事に関する現実的な道徳を見ました。但し、法螺を吹く人物を私は一度も理解しませんでした。彼らは凡人に追従していたと言えます。この平等が彼らに神々を生んでいたのです。但し、彼ら以外には神々も〈神〉もおりませんでした。私は見たことを話しているのです。

求められもせず、急がされもしなかった当時の沈思黙考には、私が今でも見抜けない観念が現れ始めていました。私は何時でも、人間を信頼して良い理由を沢山見付けました。ここでは更によりの確な理由を見付けました。私は、命令も脅しも無く全てのことが行われる、平等な者たちによる共和国が存在しているのを見ました。それと同時に三か月間、私は選抜された班に極めて広汎な権力を行使したこともありましたが、ところが私は命令することが何回かありましたが、単に礼儀上の愚かな問題を正すためでしかありませんでした（からかわないこと、侮辱的な渾名をつけないこと）。それは何でもないことでした。一方の上にもう一方が生活していたこの上下関係の環境において争いを宥めるに、私の年齢は全く十分な権威を与えていました。危険で草臥れさせる軍務に関しては教えるだけでした。班の最年少者が、単に伍長である私の署名を持って休養のために後方へ行ったことも私は思い出します。彼はナンシーまで行ったと私は思っています。二日遅れて帰還したのを私は知っていますが、言い訳を言うことも、非難することもありません。只、十二時間眠った後で彼は、他人の仕事にも手を出し始めました。私は、彼がもう少し遅ければ、彼にやらせなければならなかったのです。

そして私の考えはこうです。常に武装された怒りや、常に見せつけられる死への脅威は、人々を最前線へ追いやるために必要であるとは全く私は思いません。反対に、軍隊の秩序に責任を持つ将校が絶えず気を遣わなければならない危険とは恐怖ではなく、反抗であると思います。反抗は、何時も恥をかかせる命令という確実な方法の結果であると思います。それを細かく見てみましょう。恥をかかせられることは、単に侮辱するとか、度々酷くからかうことではありません。確かに、その下劣な習慣は直ぐに全ての愛情や尊敬を消して仕舞います。でも、恥辱は脅迫的言動そのものの中により多くあるのです。それは自分の勇気で戦争というものに耐えている者を明らかに臆病者扱いすることに帰着します。この種の不正は決して忘れませんし、それは上官に認められている非人間的な権力が齎し、上官はそれに酔っています。権力は人間を墮落させる、と私は屢々考えました。私はそれを何回も見ましたし、上官たちを恥じました。この伝統は何処から来ているのか、私は理解しています。フリードリヒ大王の軍隊は徴兵官たちによって買われた奴隷たちの軍隊でした。上官たちは別種の間人でした。私は、そのような制度が生まれた感情を殆ど想像出来ません。古代ローマの円形闘技場の剣闘士にも名誉や団結心による競争がなかつ

たのでしょうか。上官は殆ど何時もそこに戻ります。しかしながら私は、極めて礼儀正しく全てを身に付けていた二人の上官と知り合いになりました。注目すべきことに彼らは海軍から来た人で、黒い制服を着ていました。そして、海の中の船の上では説得力と、恐らく真の友情が必要であるのは明白です。しかし、一人の乗組員も逃げられないのも明白です。

非常に合理的な砲兵の仕事にもう一度戻りますが、それは人命救助者の仕事に似ています。しかしながら、戦場の先頭に行く歩兵隊は、もしも反抗のあるゆる観念や熟考の観念でさえも先ず消さなかったなら、砲火に晒されて絶望的な集団であっても押し進めることが出来るのでしょうか。進めることは出来ないと言いたいです。しかし侵略戦争は又、全く残酷で私たちの道徳観念に反していると私には思えます。防衛のためであるなら、それは常に必要やむを得ないのですから、あなたには強制も脅しも必要ないでしょう。少なくとも教えることと罰することの方法は、根本的に変えなければならないと私は思います。ところが絶対的権力は数多くの人々に愛されていて、それを行使する全ての人々を多少なりとも墮落させます。それから私は思うのですが、侵略の教義とは根本的に権威の教義です。そして侵略とは、軍隊に守られて狂気になるまで自慢する非人間的な権力を真っ先に証明しているものです。それとは別の理性的な戦争がありますが、私はその詳細については十分に理解していません。何故なら、取分けその準備において人間の惰性と軽薄さを考慮に入れなければならないからです。私は恐らく、この理性的な戦争が何であるか認識すべきことに大して執着しません。そんなものは無いだろうと思っています。そうです、侵略の精神がその時至る所で追撃されて、あらゆる交渉や議論から追い払われるなら、平和になるだろうと信じます。というのも恨みや、安易に大袈裟に言う演説に陥れば、お互いに戦うための両者にならざるを得ないと私は思うからです。諸国民というものは、乱暴者や酔っ払いや狂人がいる個人のようなものではありません。諸国民は、平均的な人間性の法則によって規定されます。そして少しも脅威を与えない国民は、決して攻撃されません。しかし、私はここで政治の中の道に迷っています。私が二十年以来引っかかって来た問題は純粋に技術的なことです。防衛軍とは何か、あるいは単に国土防衛とは何でしょうか。問題はそこにあります。(完)

(1) レイモン・ポワンカレ(一八六〇～一九三四)は、対独強硬策を推進した大統領(一九一三～二九)で、数学者のアンリ・ポワンカレの従弟。

(2) ジョゼフ・カイヨー(一八六三～一九四四)は、対独協調を主張した政治家で、蔵相を歴任した。大戦中に対独通牒の罪で投獄された。

## 十八 軍隊

この大問題を考えたいと思う度に、私は人間のことで知っていることに先ず立ち戻りました。そして私が見て来た兵士たちのことを考えるまでもなく、私は彼らを人命救助と考えれば十分でした。彼らには危険の真っ只中へ走る迅速さ、一瞬の洞察力、全速力の慎重さ、ぎりぎりの境地の状況、迷うことのない堅固な覚悟があり、如何なる恐怖も無く、結局のところ彼らの間に確立されているのは規律であると考えれば十分でした。最も熟練した者が命令し、彼らはお互いに平等と感じています。私は、海上とか坑道の底の救助者たちについて、本で読んで貰いたいと思います。確かに救助中に何人かの死者も出ます。彼らには名誉が与えられ、模範になります。私はここに、行為にも言動にも間違いを認めません。我が身の危険を顧みずに率先して行う者は、それに相応しく謙虚です。救助者が生還する度毎に、平等が確立されます。完全な共和国が僅かな時間ですが存在しています。軍隊の秩序から何と遠いことでしょう。軍隊の秩序には一人の人間の人生に殆ど気を留めません。上官は平然と避難して寒さや泥からも身を守りますが、それは無情の意志を守るためでもあります。そこで分かることは、脅しが隠されることがなくあからさまであるので、名誉は何も演じられません。脅しは、英雄主義を台無しにして喜んでいるとさえ言えます。上官は言います、「かくして脅されなければならない。先ず脅した。名誉は二の次だ」。それで名誉が生き残るなら奇跡です。しかし、ここでも人間は美しいです。彼は軽蔑する権利を購入し、皮膚で支払い、他に何も持っていません。私はこの喜劇を何回も見ました。それでも敢えて勇気を出して乗り越えることに自ら感謝するのは言うまでもありません。私は、軍人が何故何時も勝つのか良く分かりました。しかしその上更に、私は一番熱心に注意を向けました。この時、私は物理学者の思想に基づいて勝ったのです。人間のイメージが完全に一点で見出される時は何回もあるのです。

反乱の問題は各瞬間に何時も提議されます。強靱で十分に武装した人間の挙動には驚かされます。彼は、上官とは反対に向かって歩きさえすれば良いのです。しかし、人間の生命が乱費される悲劇的瞬間において、眼の前の上官は悲惨な仲間でしかなく、彼は危険から救い出されるでしょう。それからどうなるのでしょうか。一兵卒が納得して罪を許す孤独な復讐心は幾つもあります。それは集団の中で消えて仕舞います。敵は眼中になく、敵は参謀本部の人間であることを私は欲します。兵士だけが戻って来る時は、何という罵詈雑言でしょう。しかし上官は誰もが彼らの言うことを聞きたがりません。上官はその場にはいないことを覚えます。権力は、兵士と同じ様に泥まみれの服を着た、最も謙虚な戦友でもある下級の軍人たちによって行使されるのです。私は反乱を見たことがありませんでした。どんな風にして始まったのか良く知りません。どんな風にして終わったのかも良く知りません。しかし反乱は、反乱の手が及ばない人々に由来して、彼らに狙いを定めていたのを私は知っていました。この残酷な問題を少しでも理解したいのなら、船を考察しなければなりません。そして、この種の行動においては実行者たちの美德が消えるのを待たなければならない、と私は言うでしょう。その人間は悪い兵士の水準に落ちるのです。誇りはありません。そのことは沢山のことを説明しています。

これらの全ての観念が明らかになっても、私の問題は依然として不可解の儘です。どんなに人



間的な上官であると仮定しても、単純な制度に復帰せずに何時も勝利することをあなたは何故望むのでしょうか。上官たちは交代でやらねばならないでしょうし、私もこれに否定しません。何故なら私は、砲兵中隊には指揮することが出来る砲手が、明らかに少なくとも二十人はいるのを知ったからです。しかし私にとって根絶するのが最も難しいと思われたのは、死ぬのが美しいという偏見です。それは愚かな観念です。けれどもそれが何に基づいているのか、私は良く分かります。海や火と戦う時は、海や火に恐怖を抱かせる観念は少しもありません。反対に人間と戦う時には、相手から希望を奪って怖がらせて、恐怖を抱かせるようにしなければなりません。純粋な自己犠牲は無駄でも、それ故に最高の価値と力があります。しかし勇気を出して行う力は、双方とも同じであると思わなければなりません。現実の兵士にとって少しも疑わなかったこの観念は、確かに英知の始まりの一つです。

それ故に私は上官の核心を攻撃します。上官の最愛の核心です。私は、敵が人を殺すことに疲れるまでに、最良の人々を殺戮させることが滑稽であると示したいのです。逆さまになったこの正義の醜悪さも、間違いなく最良の人々を非難しているのです。いずれにせよそれは本来の強さを憔悴させます。そして、それ以上は許されません。そうです、それは許されないのです。死体が堤防を造ったり、火を消す観念で救助者たちが前進することは決して許されないでしょう。如何なる国でも殺人者を捕まえるために、最も勇敢な警官たちが殺されるのは決して世論が認めないでしょう。というのも、それに敵の弾薬が使われているからです。しかし、それは全ての証人たちにとっての恐怖であり、直ぐに罰せられるでしょう。私は一つの説明しか理解しません。それは戦争においては直ぐに罰せられることが、議論することと同じ行為であるということです。これらのことを考えると苛立たしく、スタンダールが言うように、無力な怒りはその人間が自分自身の裡に伸ばすのを好まない情熱の一つであることを私は知っています。従って私が要求するのは、私たちが被っている危険なメカニズムを、少なくとも少しずつ取り外すように努めながら、怒ることなくこれらのことを思考することです。私が見て来た将校たちは、服装も話し方も心に残るものは何一つ無いに違いないと言うのは残念です。その研究をもっと進展させるのは困難です。従って革命家たちも、そのことにはお構いなしです。まるで新しい軍隊は、古い軍隊から何も貰わずに自ら進んで行くかのようです。悲しいかな、ジョレスと共に新しい軍隊は、古い軍隊よりも悪いものでした。この仕事は全てやり直すべきです。そして、兵士全員が死ぬことを待たないようにしましょう。

共産党の赤軍を人が私に語ってくれたことは、本当であるかどうか私には分かりません。彼らが行進の時に持っている旗には、軍隊は防衛のためのみにある、軍隊は決して攻撃しない、と書かれているというのです。兵士たちが権力と服従の限度をこの様に眼に見えて持っていることは、少なからず重要です。我が国の軍隊も、あらゆる言葉の意味において国土防衛軍であり、国境の標柱を越えたら兵士たちは服従から解放される公示を至る所で掲示されてあるのを私は望みます。この考えは、例外なく将校たち全員を怒らせることでしょう。自分が望むように振る舞っても何でも権利があるという概念を持つのを一つでも兵士たちには決して与えてはならない、と将校たちは言うでしょう。生きる権利が勿体ぶって廃止されて、どんな権利が存続することが出来るのでしょうか。その困難は、将校が唯一の権限を持っていて、しかも極めて悪い証人であることから来ております。恐怖が、悪い意志に反対する唯一の方法であるのは本当です。しかしこ

の命令方法が、全ての悪い意志や策略を正当化するのも本当です。自由な軍隊においては、命令はそれ程求められない、と私は推測します。確かに、同種の兵士たちであるなら決して求められないでしょう。見かけは賢明そうな私たちの文明において、私たちは信じられない程の奨励金を、苦も無くその悪意ある人に与えています。上官にお世辞を言いたくて仕方ない者、部下たちを侮辱したくて仕方のない者に、絶対的権力を選ぶことが許されています。それを笑うことは、死の咎を受けるべきものとして禁じられているのです。そしてこの唯一の選択から彼は皆から尊敬され、一般人の権力には恐れられ、公然と嘲笑しているのです。それで彼が支払う代価は何でしょうか。それは、二十歳になった者たちが戦場へ送り出されて、何よりも人生を投げ出すのを意味する危険を負うことです。しかし危険は年齢と共に減少します。この選択は、最悪の野心家たちが除外されるようなこともありません。取分け、文学者たちが賞讃する典型的な人物像が育てられますし、誰も真似をしない訳には行きません。私としては絶えず夢を抱いて、何歳になっても私を将校と見て、話したり行動したりして戦記物を貪るように読み、ついにはアレクサンドロスやカエサルを崇拜するようになりました。しかし権力は本質的に自惚れと無知に溢れていることを、私は十分に分かっていましたので、食べ過ぎの快樂のような崇拜の快樂を自分に禁じました。そうして私はあらゆる人々に、あるいは殆どの人々にも同じ感情があることに気がきましたので、ロシア人たちが行ったように一度に全てを変革しなければならないだろうと思っていました。それでも彼らは実際にそうしたのかどうか、軍隊に対して行ったのかどうか、私にはそれを知る術がありません。それらとは別々の夢によって私は、合理的な観念に立ち戻りました。それは小さな変革しか望まないものでしたが、それで十分です。前に既に引用しましたが、諸原則は私たちの行動の実際の曲線を座標軸に関係させるものである、とレーニンは言いました。それ故に諸原則を救済しなければなりません。それらの諸原則とは、ここでは自由、平等、博愛であり、何時もそのことを考えることです。そして、それは悪しき諸原則を變形させるとか弱らせることでも決してありません。私がここで見るのは一種の道です。しかし、私はそこに入ることが出来ません。

私は先回りして言います。私が砲兵時代のこの当時、私は時々苦い経験をしました。上官たちは正しかったと私は気がきましたが、上官たちが正しかったことに私は耐え難かったのです。私は全てのことにぶつかりました。私が毎日訓練して書いていた『マルス』のテーマを人は理解するでしょう。私はこの本を何回も書き直して修正しました。それは悪い出来です。少なくともそれは、一兵卒の真の動機を報告することになり、如何にして反抗が、結局は反転して敵に向かうのかを説明することになります。上官たちは愛されていないし、恐れられてもいないことを知らねばなりません。それは醜悪な思い上がりのなれの果てになるでしょう。更に、全てを規制する思想としての軍隊的暴力であると私たちが見ている一つの制度のなれの果てにもなるでしょう。私は敢えて言いますが、命令の精神は文学や哲学や数学の上にも既に余りに多くの圧力がかかっています。私たちは軍服を着た中隊長たちによって教育されています。私も、彼らの一人だったのでしょいか。(完)

## 十九 芸術

その時は、出口の無かったこれらの思索が私だけが知っている悲しみに立ち戻って憔悴させていたのか、私には分かりません。私がもう一つの別の道へ投げ込まれるようになった原因は、偶然だったのです。それは一九一六年の春でした。私はシャンパーニュからフリエへ戻って来ましたが、その地点は緊張感が漂う前線でした。恐らく、ドイツ語学士であった一人の兵士が、無線技士によって毎日受信した作戦公報を翻訳して助けてくれました。彼は、有名な「我思う、故に我あり」に似た金言を私に尋ねてましたが、それはロックの言葉のようでした。私は語呂合わせをして答えました。しかし彼は、皆が読めるようになる本当の手引きがあれば大変に便利だろうとか、この私にはそれを書く時間が十分にある、などとしつこく言いました。この男は何故か知りませんが、姿を消して仕舞いました。私たちの翻訳では大変可笑しなものになりました。勿論、私はその〈手引き〉のことを考えて、それを作ろうとすると、その執筆は全くすらすら書けることが分かりました。ところが私は、病院に三か月間入院することになりましたが、それは私には幸福でした。そこで私は悠々と一日に一章ずつ書きましたが、その章は直ぐにポストに投函されました。病院で書いた章を見分ける術を私は知りません。私はそれらに特別な匂いを少しも感じません。しかし、私は『精神と情熱に関する八十一章』のうちの一つである「デカルト讃」は、前線へ戻る列車の貨車の中で、まさしく戦火の中で書かれたことを覚えています。この一章は、偉大な人々を判断するための冷静な方法で、私を何時までも解放してくれました。既に余りに教科書的であるこの哲学概論書は、直ぐに書き上げられ、可能な限り早く印刷され、検閲されることもありませんでした。というのも検閲などをすることは、私には我慢出来なかったからです。戦争中に出版され、私は幾らかのお金も手にしました。私はもの書きになりました。

この仕事は容易なため、私に書きたい欲求を与えました。喜劇の場を幾つか素描しようと思いましたが、完全に失敗しました。それと同時に『壺王』という表題の風刺小説を書き始めましたが、ついに完成しませんでした。そのことは私が以前に書き残した別の原稿のことを考えさせてくれました。最も古いものは、『第一哲学に関する手紙』という一巻になっています。このことについては、もっと早く考えるべきだったと思います。何故なら戦争へ出発する二日前に、それを再読して修正しているからです。これは余りに悲劇的でした。しかし他にも悲劇は沢山ありましたし、色々な考えも沢山ありましたので、この原稿は二度と読むことがありませんでした。その後、他の原稿もありましたが、紐で束になって眠っています。私は訂正するのが好きではありません。新たに別に書き始める方が好きです。しかし、幸せだったタントンヴィルの病院の話に戻ることにします。そこには殆どの人が止まりません。私も、歩兵たちに羨ましがられた足の骨折を伴った捻挫が治った後には、出発しなければなりません。一週間の休暇を過ごした後、ヴェルダンへ戻りました。この旅行は陰鬱です。暇ばかりになると、想像しては恐怖を抱きます。絶望が私の道連れでした。作品を書いていたので、その仕事は私を助けてくれました。私は新しい章を幾つか改めて思考しました。私が書けるものは全て私から引き出してやると断言して十分にそれに成功していた人が、〈芸術〉について書かないかと既に長い間求めていました。私は芸術について一度も筋道を立てて考えたことがありませんでした。幸運な偶然も幾つかあり

ました。職業軍人だった私の中隊長は素人の画家でした。彼は退屈していました。すると私の肖像画を描き始めました。それは絵画のことを話す機会を作りました。彼は良く話しました。彼はセザンヌの複製を幾つか私に見せました。私は、誰でも知っている絵葉書（ダ・ヴィンチ、ラファエル、ミケランジェロ）を送って貰い、私たちは美術批評家になりました。私は、その中隊長よりも進歩が早いと気付きましたが、彼は殆ど好人物であることが分かりましたので、そのことを彼に言うのは控えました。諸原理が大変早く分かって来ました。私は書かずにいられませんでした。そして如何なる主題も、私が今まで出会ったことがなかった恐ろしく高度な難問にも拘わらず、次から次に幾つもの章を大変に早くポストに投函して送るようになりました。その後、私はその原稿を何も修正しませんでした。その様にして『芸術論集』は生まれましたが、それは何時までも私のお気に入りでした。

しかし、この問題について私が如何に無知の段階に止まっていたのかを説明するのも良いことです。私が音楽を愛していて良く知っていたことは、既に言いました。どんなに才能が無いと思いつつも、カンバスと絵の具を沢山使い果たして来たことも、既に言いました。その上、美術史には完全に無知でした。ルーヴル美術館で、私は「勝利の女神」を観てびっくりさせられ立ち尽くしました。その他の作品も、雨のように私の上を通り過ぎて行きました。大戦の少し前に、ミラノのブレラ絵画館でラファエロの「聖母マリアの結婚」を観ましたが、私の心を貫きました。しかし私は長い間美術館が退屈で仕方なく眠気を催すこと、大建造物が嫌いだったことを言わなければなりません。私はそれらを厭々見ていたのですが、それは良い見方だったと今では思っています。スイスやイタリアへたまに旅行しても、山や湖や村々しか注意して見なかったのを思い出します。私の習作ノートにもそれらの痕跡を留めていて、美学という言葉は一言も書き残していないと思います。文学作品についてはトルストイ、ユゴー、ルソー、そして戦争の少し前にクローデルの『人質』に対して行ったように感動者の分析を書くことしか知りませんでした。『人質』は、『谷間の百合』、『パルムの僧院』、『リュシャン・ルーヴェン』、『告白』と一緒に、私の兵隊時代の本の中にありました。しかし私は、文体については如何なる観念も抱きませんでしたし、文学と絵画の比較についても如何なる観念も抱きませんでした。戦争前に、私が全ての絵画作品を完全に知らないにしても、画家の名前も全然知らなかったもので、物知りたちは屢々私を馬鹿にしようとしたのを覚えています。会話の中にもそれが見えていました。しかし私は、人の意見など気にしていませんでした。私には私の神々と悪魔たちで十分でした。この様にして私は、全くの素人として芸術問題に取り組みました。これは有利な状況でした。何故なら人が読んであるものにも、言っていることにも知らずに済んでいられたからです。こうして私には諸芸術の一つひとつには一作品で十分でした。それは人が散歩しながらでも獲得出来るに事欠かない認識でもあるからです。この問題については注意すべきことがあります。それは私独りで行ったのではないことです。しかしここで私は、或る種の混乱を避けなければなりません。全く反対に、殆ど形を識別出来ずに、一条の光の中で埃が踊っているような、今でもカオス（混沌）の中にある一冊の本の観念を私は与えたいと思います。この種の叙述は好きに任せて、反対に混乱も迷いも無い一冊の本を私がつけ加えることの出来るのが全てです。芸術については、二つの論著があります。一つはカントの『判断力批判』で、私が読んでいたものです。もう一つはこの問題についてのヘーゲルの講義集で、ベナールが翻訳していますが、私は未だ読んでいません

でした。私の『芸術論集』が、これらの有名な本のどちらとも似ていないことは、少し調べれば分かることと思います。そして私はそれらのどちらの本にも感動し、最も生き生きとした感嘆のうち何回も沢山読みましたけれども、それらの本を読んで来たことは既に危険な罠のようなものであったと考えています。しかし通り抜けたのは、如何なる奇跡によるのか私には分かりません。

遊びから芸術に取り組むのは、哲学者たちにおいて流行していました。この考えは私に嫌悪を催させました。そのことは、何故私が全生涯を通して大変に立派な人々を軽蔑する態度を取って来たかをご理解して戴けることと思います。彼らは共同で研究して、一人ひとりに賢明な序文と、動物とか未開人に関する何らかの事実をつけ加えて、神無くして哲学を前進させて得意になっていたのです。私としては早い時期からずっと連続して、思考する訓練をして来ましたので、類似は対立以上に私に教えるものはありませんでした。私は、これもあれも混同して言うことを、決して自分に許しませんでした。そして、芸術が遊びであると言われることに、私は本当に話にならないと思われました。反対に、一見して偉大な作品群には真剣さに彩られていることに私は気付きました。そしてその後で直ぐに、偉大な作品の特質はそれらを残し続け自らの領域をその後もずっと守り続けて行きますが、それに対して遊びの心は成果を消し去り如何なる勝利も決して刻まないことに私は注目しました。それに加えて宗教と芸術の間に、如何なる時代にもある明白な関係は、芸術家たちが祈りとして何時も自分たちの仕事を行っていたと理解させてくれます。又私は一片の作品でさえも、浮かび上がらせているように見えたあの熱狂的な熱心さを、別な風には理解出来ませんでした。私の眼から見ると、芸術家は何よりも職人で、仕事に精通した人で、自分の仕事を愛する人でした。その上、その点に関して芸術や建築において最も力強いものは、私に教えてくれるものが十分にありました。何故なら、ここでは職人でない人は何も提供しないからです。それというのも建築する技術や重力の必然性や材料の性質は、殆ど絶えず形状や装飾にさえも規制しているからです。しかし、私は装飾を消し去りました。私の思考の中で保留しました。壁は装飾が無い方が美しく、水道橋は装飾の必要がなく、美しい花瓶は装飾が無い方が美しいではないか、と私は心で思いました。更に、この例は陶工の技術と共に建築家にも類似性があると理解させてくれました。確かに一個の美しい花瓶は、円天井のように均斉のとれた堅固な状態を表しているからです。そうして遊びという芸術にとっての愚かな観念を全て一掃するために私は心に思ったのですが、子供の遊びには子供そのものよりも美しいものは何も無いということです。子供たちは庭とか人形のように自分たちが創り上げた対象に少しも関心がなく、子供たちの行動がそれらによって維持されれば十分なのです。棒はサーベルになります。紙の帽子は將軍の帽子になります。椅子が二つあれば馬車になります。全てはこれらの行動が齎されれば十分なのです。職人が最後まで専念して永遠を望む剣の柄頭と比べて、何という対照でしょう。確かに歌曲や合唱隊やその指揮者に見られる短い劇においては、構成や調和への関心があります。例えばラ・トゥール・プラン・ガルド（塔は注意する）という遊びにおいては、素晴らしい重力があったことを私は良く知っていましたし、見たこともありました。しかし、それは遊びよりも寧ろ宗教のように私には見えませんでした。輪舞は直ぐに興奮して醜くなりました。あらゆる遊びが、最後には荒々しくなりました。私は力を見せつけたり、それらを駆使するために跳び上が

る術を、嘗て一度も舞踊と呼びませんでした。熱狂にまで行って仕舞うロシア舞踊のパーティーには少しも我慢出来ませんでした。無言でも真剣なブルターニュ地方の舞踊には反対に私を感動させましたし、全員の顔が伝える美しさによって一度か二度、私も靈感を与えられたようになりました。しかし結局のところ、これらの考察は全てが論争的でしかありませんでした。それで私は論争することを恥ずべきことと判断しました。それは恥ずべきことであり、判断を惑わすのに特有なものなのです。

私が知的労働者たちの仲間のことを考える度毎に襲って来た怒りのことを、誰も想像出来ないと思います。彼らは、一般的観念と言われているものに固着して信じていました。思想のための配列を考えながら、巧妙に適用していました。私は自分を、改革者で鞭を上げているように感じていました。当時は大変に滑稽でした。何故なら、教授たちとの昼食会などで私の怒りの感情の動きをうっかり漏らせば、紳士連中は非難の眼で私を見ていましたし、私は思い出しては顔を赤くしていたからです。しかし、逆上には勝てませんでした。私は平静でいることが出来ませんでした。ルナン、サント・ブーヴ、テーヌの低級な三人組が私に襲って来たかのように思えました。しかも私はまるで人生がかかっているかのように命がけで、見事な正面から襲いかかりました。今でもなお、同じ火が私を元気づけてくれます。そのために文学者連中は誰もが少し当惑していましたが、それでも大変に良くしてくれました。かくして私は、会合でも集会でも会議でも、耐えることが出来ませんでした。かくして私は、用心から居眠りをしているのでなければ、上品な議論でも少しも従うことが出来ませんでした。かくして私は、若者たちしか支持してくれませんでしたし、若者たちも議論しないというのが条件になっていました。若者たちはこの条件を理解していて、新しく来た者たちにも迅速に承知させていました。このことが認められて、私はその時に賢者になりました。私は自分自身に反論する術も覚えました。その戦場の多くの人々の中で独りであった私は、思想の修道院の中のように自分だけの理由で、自由と厳格さと公平さを感じているのです。それによって私は単に忍耐すれば、文体を獲得するに至るのも確かであったと、お分かり頂けることと思います。

少し協道に逸れました。私を戦いに追いやった観念の姿は、私の多くの私的な戦いの一例であり、殆ど全てが隠されていました。自ら示したものに従って私が自分自身に大いに満足している、と人は結論付けました。以上の理由で、人が認識していないことを人々のために書こうとして作家になるのです。戦いの孤独は、私にはこうした移行への準備でした。私は沈黙し、見知らぬ読者に書くことで自己を形成しました。

芸術の創造を想像力による作品と見做す人物たちで、非常に教養が高い人々は必ずおります。ある意味でそれは真実でもあります。しかし私は、想像力への批判を十分過ぎる程押し進めました。そしてそれらのイメージの空虚さを調べ、それらがある場所の人間の肉体の中へ再び入らせるまで追跡しましたので、私は最早虚構によるこの虚構には騙されませんでした。それに従って芸術家は先ず物体の無い存在を、彼が想像する完全なものとして構成して、次に大理石にしる素描にしる、言葉とか文章にしる、他人に伝えるための方法で製作するのです。簡単で誰にも明解なこの教義には最早、土台がありませんでした。何故なら所謂想像力による創造とは、ドアの背後に泥棒がいるように見る眼以上に寧ろ信じることであった、と私は十分に確信したからです。しかしながら、この想像力の教義は、芸術に関しては未だ消極的なものでしかありません

でした。芸術家は最早、内部の規範を持っていませんでした。このことを私は良く理解しました。しかし、その規範は何処にあるのでしょうか。その様な版画は全て屑箱へ投げ捨てるべきです。その規範は内部にも外部の自然にもありません。それは作品そのものの中にあるのです。如何なる回り道を通して私は、否定的な創造的想像力から創造的仕事の観念へ移れたのでしょうか。私は、想像的であると同時に現実的である歌を歌う音楽に、その通路を見出しました。その耳は、喉が声を作り出すのと同時にその声を聴いているのです。私は舞踊にも別の通路を見出しました。何故なら踊ることのない想像した舞踊というものは決して無いからです。ここでのイメージは全てが人間の肉体の中にあり、人間の肉体そのものが見られたり他の人に模倣されていたのです。踊る本人には見えませんが、少なくとも心の奥底では感じていました。そこから集団性という舞踊の条件が現れて来ました。しかし、建築や絵画のことは何と言うべくでしょうか。芸術としての系列がここでは何もなくなりました。建築家の肉体は建築の対象ではなく、画家の肉体も絵画の対象ではないからです。それ故に建造物から始めて芸術の対象の系列を取り戻さなければなりません、決して上手く行きませんでした。何故なら人間は最初から踊りますし歌うからです。私はどんなに困惑したかを言おうと思います。全ての問題は、満足された順序を発見することにありました。しかしながら、私には幾つかの強力な経験による記憶がありました。それらは先ず私を、歌や舞踊から遠い場所へ導いたのです。演劇の背景がそうであるように、見かけは実際の建造物と少しも同じでないことに私は注意しました。そして更に私は、背景に穴や裂け目を見た時、それらと、常に美しさを完成させていた堅固な対象物の素晴らしい磨滅とを比較しました。又、私は時々、金属に彫られた充実した作品と、屢々石膏を詰め込んで薄い模造品として鑄造したり吹き入れたりして創った作品とを比べてみました。後者の模造品は、一寸した衝撃にもレリーフが変形して、妙な風にすり減ることに私は気付きました。鑄造された作品に関して私は少なくとも、鑄造された痕跡や気泡が出来て醜くなっていることを確認しました。ここでの私の確信は大変に強いものでした。しかし、それでどうなるのでしょうか。強固な材質、力の要る労働、時間が経って古びた色、更には一種の廢墟も美の条件であると言わなければならなかったのでしょうか。幾つかの作品がそのことを証明していますが、絵画はそうでなくて見かけの外観だけです。詩も更に外観だけです。というのも材質は何処にあるのでしょうか。

絵画の問題に関して私は先に言ったように、幾らか描いた経験がありましたが、大した経験ではありません。戦争中は、あらゆる人物を素描することが出来次第に楽しみました。それらは全てが大変良く似ていたと私は良く分かりましたが、醜いものであったことも分かりました。しかしながら、私は単に描くだけの顔と、くぼみを刻まなければならない顔とに相違を見つけました。後者の顔の方が少し上手く描けました。結局のところ偶然から真の芸術家たちが、自分たちの全生涯をそのようなものであったと想像して、私も教わるものがあつたのです。私のデッサン癖は、片面がニスに塗られた柱時計の箱に向かいました。色そのものは大変にお粗末なクレヨンで、それに攻撃するように描きました。クレヨンは箱の表面に五回に一回も噛み合わない儘になって描けませんでした。しかし兵士は忍耐強いです。節くれ立った幹のようなその箱の片面に、私はアダムとイヴを描きました。更にそこに、蛇が姿を現しているのも同じ画面の中に描きました。次に、色を出すのが難しかったアダムとイヴは、肌の色も樹木の幹に似たものになって仕舞いま

した。しかし、すっかり夢中になって柱時計の箱のくすんだ色を手直しました。私は執拗でした。ある日、中隊長がこの物を見て言いました、「これは素晴らしい」。彼は直ぐにこの板をノコギリで切り取って、その儘残そうと企てました。でも、この企ては他の沢山の企て同様に戦争に埋もれて仕舞いました。私が殆ど不完全なこの絵を思い出そうとすると、私は少しも好きではないのですが、原始芸術との類似性をそこに見るのです。このことは、中隊長の感嘆を説明しています。彼は全ての芸術家のように、高貴である人の用心深さによって、美しさよりも醜さを好んでいました。力強さの始まりが仕事の遅さと困難さからの結果であり、一つの形式が失敗の続きと何時までも繰り返される試みによって、現実のものに出来ると私は理解しているように思いました。どんなに些細な仕事においても、結局のところ出来上がった物を見詰めたり、偶然の出来事でさえも利用したりする時間はあったのです。その行為と同様にごつごつしたこの考察から私は、ついには余りに単純で容易に見損なう観念が見えるようになりました。それは画家がタッチの効果を、タッチが与えられた後でしか見ないということです。このことは私に、彫刻された一本の杖を思い出させました。その杖は誰もが見覚えのあるもので、自然の形状に従って作られたのです。つまり杖の疵に従って家鴨を彫って行ったのです。その下絵になった疵が家鴨に似ていたからです。そこから私は、岩の形が修道士や馬や鷲を大変良く表していることを考えました。この形を完成させようとするのは自然である、と私には思えました。そしてこれと同じ考えが、画家や彫刻家の活動にも絶えず流れていたのです。何故なら全ての下絵は、その考えが継続されて行くのを求めているからです。従って偶然が、計画の中には絶えず存在しています。事物と職人とのこの結合は、大いに褒めそやされる想像力の創造性に、私には有利に働いてくれました。雲が絶えず形を創り出していることは、こう言って良ければ誰もが知っています。少なくとも雲はじっとしていませんし、私たちも雲を変えることはありません。彫刻された顔も終始一貫して、一種の雲です。如何にして私がこの道を通って、素材そのものへ連れ戻されたのか、お分かり頂けると幸いです。

これらの全ての観念は、私が見なかつた一点に集中しているように思えます。私にはそれで十分でした。私は、諸芸術の相違に相応しい整理と章の区分を見出すや否や、何処へ行くのか良く認識することもなく書こうと試みました。その主題には全ての基礎がしっかりしていて、喜劇、悲劇、彫刻、絵画、散文の各々が進展して次々に要求して行きましたが、殆ど各章が次々に要求して行くことにも同じ様に気付き、それらの対立によってそれら自身が分割されて行くことを確信しました。その様なことが私には長く間ずっと起こりましたし、殆ど衝突することはありませんでした。私が何時でも何処でも眠ることを覚え、そうして世界とそれらの思想を拒否しながら半分眠り、半分眼を開けるのを覚えたのは、戦争中です。私がこの時作り上げた方法は大変な策を弄しましたが、言葉の同一の輪の中に身を置いて、脈絡のない全てのことを思考するものでした。この状態は同一の言葉の繰り返しによって、不眠に似ていました。しかしそれは、推理が結び付くのを妨げる無関心による不眠とは反対のものです。それ故に私は、ルソーが自分で行ったのと言うような文章を創ることは、到底あり得ませんでした。全く反対で、太陽の光とか炎の輝きのような身近なものの認識を後に延ばすのと同じやり方で、私はこの仕事を後まで延ばしました。未だ混沌の中にあるこの世界は、私を幸福で満たしてくれました。それを作り上げることや、そこから離れることを、私は急ぎませんでした。それと同時に、私が自分に課している問



題に関する内的な足跡を感じていました。両者は一体になるしかありませんでした。時折、一瞬継続するだけのこの休止状態が、仕事と呼ばれているものの機会の一つであることを、私は今確信しております。それに引き換え戦前の私は、何かの問題に良く引っかかると前へ進めずに、思考するのに辛い思いをしていたことを大変良く覚えております。それは人が良く見たいものを決定するのと同じ間違いです。この間違いは、疑わしいと思わなければならないのに、そこから知識を得ようとするところから来ています。ルソーが良く分かっていたことは、優れた作家たちには決して反論しないで読まなければならないことです。でも、私はそれ以上のことを発見しました。優れた作家たちをそんなに理解しようとする必要はなく、彼らが言っていることに十分親しみを覚えることであるのを私は発見しました。この読み方は判断力の休止も可能にして、その時は閃きによって判断力が行使され、直ぐに一種の眠りの中に再び陥ります。この準備方法は少しも知られておりません。私はここで知っていることを言っているのです。いずれにせよ、その時は良く目覚めていて、如何なる不安もなく観念を空にして、私は筆を執って表題を書くに至ったのです。何故なら、始めは最も単純であっても、大変上手に書かれて中空になって行き、私は職人のような安心さに満たされて行くのを知っていたからです。かくの如くして壁に加えられた一個の石は、次の石を要求し、もう一度その姿を描いているのです。その後、私は説明するように訂正を加えないやり方で、同一の言葉でもより細かく熟考するようになりました。その時の私の状態では、ある批評家が指摘しているように、詩歌があらゆる芸術のものであるという考えに至るのを私が理解するには程遠く、私には訳が分からないものでした。別の批評家が言うには、音楽がその仕事振りでは余りに論じられなくなるということです。ところが音楽と文章芸術は、私が最も精通していた二つの芸術でした。恐らく私は、他の芸術のように始めから無知蒙昧ではありませんでしたので、逆にそれらを根元まで解明する術を知らなかったのです。『芸術論集』は平和な時代になって初めて出版されましたので、話は先に進み過ぎています。それは戦塵の中で書かれて完成されたか、あるいは殆どが戦塵の中で書かれたものです。休戦交渉使節が言うように、あらゆる追加を拒絶しています。それでも私は、不完全なものをそこに見なかった訳ではありませんでした。しかし、それが何でしょうか。表現それ自体は手を加えられませんでした。私は、もうそこに手を入れる入口を見出ませんでした。その儘で印刷屋へ原稿を渡さなければなりません。その後、私は最早手を入れないどころが、考えることもない知らせをこれ程強く受け取ったものではありませんでした。この書物は、決して完成を見なかった『マルス』とは正反対でした。

以上は戦争以外の話でもありますから、私の文学者としての生活について先に始めて、『芸術論集』については終わりにしようと思います。ミシェル・アルノーは既に戦前から、「ルアン新聞」に掲載された〈プロポ〉を集大成した選集を出版する計画のことを私に話していました。その時までは、予約購読者用に限定された四巻しか出版されていません。それらは新聞社の編集で刊行されました。ミシェル・アルノーとはN. R. F.（フランス新評論社）では何でも出来ました。これは筆名であり、私が殆ど毎日学校で会っていた優秀な同僚でした。この偶然から、出版社でのあらゆる手続きを大目に見て貰いました。しかし、既に実力者であったこの社の主人は、ルアンにおける私の読者の一人でもあったことを言って置かなければなりません。戦争が

全てを中断させました。休戦になると、ミシェル・アルノーは仕事を再開し、大変早く成し遂げました。私は目次しか創りませんでしたし、如何なる助言も与えませんでした。その二巻の選集は大変に素晴らしい出来で、私を新しく世に紹介してくれました。同様に、私が『芸術論集』を同じ出版者へ持ち込んだのも全く自然でした。彼は完全に厚意から私が望んだように印刷してくれました。この正方形の一卷は、贅沢な紙を使用していて、体裁も上等でした。愛想の良い会計係の人の話では、著作権は私自身で決めることになっていました。あなたが予想する通り、それは大変にささやかなものでしたが、私には十分な成功を証してくれるものでした。

この本の諸観念は私の眼から見れば、新鮮なものでした。しかし、私のはねつけたものは全てそれを仄めかすことさえもなく、人々をうんざりさせていた意味では読者にとっては新鮮でなかった筈でした。その説は直ぐに流布されました。今でも流布されていますが、私が美学的概念の改革者と見做される理由は何も持っていませんでした。私は寧ろ、一人ひとりが自分自身の興味から自らを改革させていたと信じていました。そして私は、自分から求めた訳ではないのに、この新しい運動と結び付いたのだと思いました。暫くして現れたヴァレリーの『ユーパリノス』の反響も、源泉は同じです。何故ならその詩人は自分固有の靈感しか聴いていなかったのは確かであるからです。そして『芸術論集』は、そこに何も影響を与えていないのは明らかです。私が未知の大衆との一致を見出すようになったのは、これが最後ではありませんでした。大衆とは限定された人々であり、威信もあります。その中で私は、何となく自分を現代的と思いました。私は会話も噂も少しも知りませんでしたが、私が信じているものへの自由な活動や人間としての活動によって、そこに浸っている自分がおりました。私たちは解放された集団を形成していました。私たちは独立性そのものによって集団を作っていました。私は、自分の作品を慎重に判断しなければなりません。その点について決定を下す人々は、未だ生まれていませんでした。私にとって疑う余地のないポール・ヴァレリーの運命は、大変に奥深い平等主義の時代を少しは私に照らし出して明らかにしてくれています。この詩人は安心したいために読まれなかったし理解もされなかった、と人は繰り返して言ったのですが、結局は至る所で読まれていますし、理解もされていることに気付く瞬間が来ます。そして、もっと適切に言うなら、ヴァレリーが私たちに投げ与えた数々の散文の断片によって、彼は既に思想の大家であり、最高の役割のためにお互いに戦っている者たちよりも遙か上を超えているのです。象牙の塔は崩れ落ちて、他の多くのありふれた考えと共に、粉々になって乱雑に散らばっています。（完）

私は遠くから戻りました。一九一七年一月に、私はデュニ（ル・ブールジェ）<sup>(1)</sup>の気象観測隊に配属されました。この任務は、未だ足を引きずっていた私のために行われました。軍人たちは、その点では間違っていないでしては。私は大変早くこの仕事を覚えました、結局のところ覚えなければならず、決して間違えてはなりません。何故なら、軍人は何時も間違いを怠慢のせいにするからです。私はそれ故に術学者たちの手中にありましたが、一部の人は非常に乱暴でした。でも、私は直ぐに彼らをからかうことが出来るようになりました。彼らは毎日、翌日の天候を予報しなければなりません。ところが彼らは死ぬほど怖がっていて、結局何も予報していませんでした。実際は多くのことを知っていて、私的には殆ど間違っていないでしては。でも、私はこの時、絶対的権力の限界を見て取りました。ティベリウスは占星術士たちを怖がらせましたが、それはティベリウスにとっては良かったからです。雷雨をずっと見張ってイギリス軍に暗号で通報しながら、私が『芸術論集』を書き上げたのはこの時です。それは、暴動も幾つかあった時でした。物資や護送士官の頻繁な動きから、私たちはそのことを何となく知りました。私の周りの人々は、それに多くを期待しているのを殆ど隠していないことに私は気付きました。この感情は、兵士や下士官たちに共通していました。この感情は、私のものでもありました。私はそれを観念に翻訳することがどうにも出来ませんでした。お察しの通り、私の考えはこの時政治にぶつかって戻って来たのです。そして結局どうなったのでしょうか。私は前進も後退もしませんでした。防御のための困難な陣地を堅く守り続けます。当時、私が会った銃後のパリの人は、心配と恐怖を表していました。そして私が彼らの卑しい考えから大変に遠く離れているのを見ても、心底からの悲嘆を表しているように私には見えました。それ以後私は、帰還兵が私にとっての一種の故郷になったようなことが起こりました。或る人々とは手の指が一緒のように今でもお互いに一緒にいる思いであり、他の人々とは激しい反論を言い合うのですが、決して私には適わないのです。それでも私は、この人々とやはり親近感を感じていました。この様な内外の喧噪の中で、私は一九一七年十月に再び教職に戻りました。私は生徒たちの小さなグループの中心にいました。自分の本も再び発見しました。通りの向こうに、ドイツ軍のベルタ砲が轟く音も聞きました。私は眼鏡を掛けました。私はこの時、非常に疲れたように感じましたが、無理もありませんでした。私は時間を費やすことを覚えなければなりません。教室ではプラトンを読ませました。私は『芸術論集』を少しずつ切って語ったりしましたが、最後には教育に最も役に立ちそうな部分を多く発展させました。それは書くよりも多くの執拗さが要求されました。

多くの観念が枯葉のように私から落下しました。私はそれらを少しも集める気がしませんでした。私はそれから、少なくとも偉大な作家たちの中を進みました。多くの同時代の人々には気にもかけられませんでした。私も、兵士にある軽蔑の気持ちから、彼らをすっかり忘れしました。こうして若い世代の人々に腕を伸ばして刺激する立場にいました。それ故に私は、多くの仲間たちの中で一人の軍人でしたし、法にも縛られない人間でした。権力者たちは、終わることのな

いこの騒動を見ない術を心得ていました。もしも彼らが正面から事に当たろうと望んだなら、敗北していたでしょう。しかし、何が起きたのでしょうか。その時代に（一九一九年）、私の労働組合に入っていた意識の高い組合員が、断固として列の先頭に立って、ソルフェリーノ橋（2）を攻撃しました。彼は橋を占拠しましたが、手に入れた時もやれることは占拠するだけでした。そうしている間に、私はそのどさくさの中で、他の橋も幾つか占拠しました。ソルボンヌは眠っていて、一つも動きませんでした。ソルボンヌは、セヌ川の蛇行部の下に、今でも汚れずに白紙の儘であります。

非難しても、ものの役に立ちません。公表しても、尚更役に立ちません。私が、彼らの社会学や歴史学に対立して如何なる社会学や歴史学をやろうとしたのか、彼らの哲学の代わりに如何なる哲学をやろうとしたのかを言わなければなりません。しかし始めに言わなければならないのは、私は少しも躊躇すべきではありませんでしたし、人と討論すべきでもありませんでした。全てが信頼に満ちていた青春の前では、政治的なものは少しもありませんでした。私は、男子でも女子でも全員に、独り言を言うように話さなければなりませんでした。しかし先ずは復讐心を鎮めなければなりませんでした。そんな心は野心家たちに齒向かう野心に過ぎません。それは何時も陶醉です。私は、全てが破壊された後で如何に同じことが再開されるのかを良く見ました。その人間たちは、自分たちの情熱を少しも考慮に入れていないのです。実際に私は、それから情動や情熱を保持しながらそれらを超える活動に従わなければ、最早教えませんでした。しかし私はそんなにも遠くを見ていませんでした。そして、あらゆる物事において目的を信用しないで、方法に専心すべきであると信じています。当時、最も力強い著者で私を激情から救済してくれた最高の著者は、確かにコントでした。私は長い間使用して擦り切れていた十巻の本を、所定の場所で再び見出しました。コント以上に心を鎮めいてくれる人はおりません。先ず彼は、堅固で冷淡な世界を自分の全思考を前にして緊張しているからです。従って彼は、地上権をカエサルか誰かに任せて、もしも世論が自由で賢明であるなら、全てに対抗するに十分であると判断してあらゆる権力や富を断念したからです。ですから私は、この力強い主題をもう一度取り上げます。汲めども汲めども決して尽きません。

しかし結局のところ、コントの中に存在し、自然にコントの読書にある隠された秘密によって、私は動から静へ達しました。そして『実証政治学』全四巻を端から端まで入念に読みました。私はコントの純粹なクロティルデ（3）への思い出の吐露を非常に信頼していました。又、人々はミュッセの詩『夜』を良く読んでいました。しかし、私たちの最高の思想を遠回しに傷付けたがっているその皮肉の精神を、私はどんなに厳しく批判しても決して足りませんでした。私は一人の人間である、と私は独り言を言いました。

ところで私はここで、力強い観念で未来性に溢れたものを白日の元に晒したいと思っています。コントは、『社会静学』の中で、言語に根拠を置くもう一つの『芸術論集』を仕上げました。私は、確固とした習慣に基づいて批判から身を守り、それに従いました。何故ならセヴィニエ校の女子生徒に出した試験課題にあつては、中身の無い平凡な考察が返って来る言語に、屢々戻っていたことがあるからです。以下は、私がコントから引き出した全く快活な観念です。言語は社会学的存在の一つです。それは真の社会を結ぶものでもあり、過去の記念事物によってのみ保持されています。そして、言語は生きた記念事物のようなものです。それは人間の遺産を含んで

いて、伝達して、それと同時に人間機構と最も緊急な機能の証拠を絶えず残しているのです。何故なら、その叫びは胸部の痙攣の結果であるからです。言語は自らを保存することでしか決して変わらないのが、お分かりになるでしょう。そして詩は、決然とした形式を保存していて、記憶が変化させることは容易にありません。同様に、詩は有機体の幸福である全てのリズムに基づいて何時も言語を適合させることに戻りますから、二重の意味で記念的事物です。詩はそれ故に一種の信仰と、私たち自身のことを思い出させる祈りを生みます。この観念は既に、決して小さくありません。私はコントが行ったように、力強い詩人のものを毎日読むことに決めました。しかしその哲学者は、私の文章の将来に私を接近させながら、私の思想の将来により近くに運んで行ってくれました。全ての私の仕事は、そのために震えていました。何故なら人が何かを言ったにせよ、言われたことを知ることが先ず重要であったからです。それらの言葉は、大作家たちが獲得したものとの関連によるにせよ、昔からの方法による表現に集中する契約や誓約という必要性によって常に自然な話し方に戻る一般的な語法によるにせよ、意味が溢れて来るに至りました。ここに現れるのは、全ての言語に特有の荘厳さであり、韻律のある偉大な記念的作品と共に、走り書きの略語による言語を予防するのに貢献する誠実さです。それらの原因を人は見抜いて、どうか長い時間を辿って来ましたが、それらの結果ははっきりと現れています。コントは、一般的な言語の意味から取られていても既に思想となっている素晴らしい言語の事例を引用していました。例えば民衆という言葉がありますが、人が望むにしろ望まないにしろ、それは同時に全市民を示しており、自らの手で働く市民たちという人々です。働かないで閑人の手を持った市民たちは大衆の前で無視されると思考するのを拒むことが出来ても、人が言うことや書くことを拒むことは出来ません。心は愛と同じ様に勇気でもあります。信仰は忠実さである、と言ったり書いたりすることを拒むことは出来ません。悪意とは、作家を無視して悪魔の全ての自由を表します。それは終わりがありません。私はその例を枚挙に遑なく発見しましたし、それにはコントの例も追加します。そして本当のことを言うなら、私は語彙にしろ関連語にしろ私の母語が思考にとっての宝であったことをついに理解しました。この知識は私の主要な仕事に結び付きました。そして、それは出来の悪い文章や、その次に響きや間の調和を欠いた文章を立て直してくれるものでしたし、何時も観念を拒絶する隠れた比喩が齎してくれるものでした。例えば「暴力で緩和された優しさ」とは書けません。それらには音楽が無いのです。そうして私は、私の哲学者を辿りながら、修辞学による教育を大いに前進させたことを確信しています。修辞学をその様に重んじることは、思考のあらゆる訓練が含まれます。私は要するに、正しい思想を美しい言葉によって見分けることを学びました。そしてこの種の発見は、刻一刻とやり直さなければならず、殆ど不可能と言われていたことですが、美しい文体を教えることに私を導きました。その様なことには、全てが二つの知識にあるように見えました。一つは証明によるものであり、もう一つは言語そのものの比較によるものです。私に言わせれば殆どが筋肉的、胸郭的、内蔵的諸条件のことです。ところで私は既に一度、詩人たちを参照しましたが、〈人間性〉そのものを更にもう一度、より一層明白にします。何故なら、言語は国民よりも古いからです。従って私は、私の前の空間を見ていました。つまり思考の巣を作るのを私は教えました。最も詰まらない実践的教育に大変近いこの種の教育は、音響や韻や数字に似て、人を酔わせる何かを持っています。諺が歌われるの

を聞くのも、その時です。私としてはどんなに小さな田舎の物語にも、叙事詩の歌を聞くようになりまし、ついには至る所に人間としての鳥の歌を聞くようになりまし。

かくして私はホメロスその人を師と見倣しました。教室で読める限り一年間は『イリアス』を読み、もう一年間は『オデュッセイア』を読むことは、一行か二行読んで中絶して注釈するのと対照的に非常に有益です。そして朗読することの評価を再び高めまし。そして、この新しいやり方は直ぐに驚くこともなくなりました。これらの詩の中に私は、人間と神々との正しい尺度を発見したからです。当初はホラティウスも試みまし。何故なら私はホラティウスの詩に偉大なもの、言ってみれば通俗的偉大さを見出していたのですが、殆どすらすらとは読めませんでした。私はギリシア悲劇にも幾つかの思想を求めましでしたが、大して成功しませんでした。私は文学を教育する必要はありませんでしたので、最良と思われたものに飛び付きました。その上、この種の訓練は時間を使い果たします。常に言葉遣いに確信を持って名作を演じながら、何故私は同じ方法でバルザックを読ませ、スタンダールやユゴーを読ませなかったのでしょうか。恐らく、バルザックには寧ろ抵抗していたのです。

私の教育方法よりも寧ろここでは私自身との対談を話そうと思わなければなりませんので、私が絶えず読み返していた現代小説に関することを少し述べたいと思います。何時も私を酔わせてくれましたが、何も教えてくれなかったユゴーは別にします。トルストイについても同じことを言います。これらの予言者たちと一緒に人は夢を見て、世界を跨ぎ、自分自身の高貴な部分を再び掻き立て、自らを清廉潔白で不屈の人間と想像します。人間の最も美しい無謀さは幼少期の夢想の続きである、と私は屢々言いました。今でも私はそれを信じています。術策など覚えたくなかった幼少期のこの部分を宝物として、一人ひとりが自分の裡に守っていて欲しいと私は思います。その様にしてロマン・ロランの『ジャン・クルストフ』や『リリュリ』は、私の心を何時も奪いましたが、私を変えることはありませんでした。私はそこに想像上の美德を育みまし。プルーストに関しては、私は情熱的な注意を払って繰り返し読みましでしたが、信じるものは何もありませんでした。それは完全に遊びです。スタンダールのことはもっと言うべきことがあります。私がこの作家のことを公表した讃辞には幸運な処がありますが、それは余りに御し難い自我を少々感受している感情と気紛れによる一種の告白でもあります。その上で私は、スタンダール愛好家たちには我慢がならないと言ったのです。その様な理由から、私は男女の生徒たちと一緒にスタンダールを積極的には読みませんでした。その代わりに孤高の立場から、権勢や権力について彼は何という見方をしたことでしょう。そこでは羨望を何時も癒してくれた観念を、あらゆる方法で私は繰り返し取り上げて揺さ振りました。それは権力の側から飛び込む者たちは、大変に低い処へ落ちることです。あるいはもっと適切に言うなら、滑稽極まりない処まで落下することです。そして権力者たちがそこで抱く怒りは、常軌を逸した悪意へ彼らを駆り立てます。諂う人々や諂われる人々から遠く離れて内省に耽るための修道院に縁の無い人々は、神も悪魔もない地獄を知るでしょう。しかしながら、この最後の審判にもプラトンのそれと同じ様にユートピアはあるのです。

バルザックはもっと現実的です。何故なら美しい恋愛と偉大な魂を無視しない彼は、少なくとも軽蔑しようと思わない怪物どもや、やくざ者どもの心の片隅に、それらを嵌め込むからです。それは彼らと私たちの縫い目は強固であるということです。地獄に落ちた人は決していないとい

うことです。善人も悪人も世界を構成する部分であるからです。そして恐ろしい装飾部分を同時にひっくり返すことが無ければ、美德のための働きも決してありません。全てはドアのように蝶番の受金で成り立っていて、行動が通路を窺っているのです。正確に言うと、バルザックの中でしか私は社会学を学びませんでした。何故なら土地と人間、家と人間、仕事と人間、交換と人間との諸関係が、全ての生活という織物を作っていて、選択の余地は無いからです。私はバルザックの政治学をアリストテレスの政治学と比べるのが好きでした。人は選択しようとするその時には、既に選択が行われていたことを発見します。何故なら世界は私たちが登場することを待っていてくれないからです。私たちはそこにいて、刻一刻と流されて行くからです。私たちが許そうとするのは、忘れられているのを発見することです。バルザックの中のこれらの観念は、決して反省的ではありません。それらは登場人物たちが起こす自然なざわめきです。新しくもなければ稀有なものでもありません。只、それにぶつかるだけです。実際に、もしも人が経験を前にして奪われるようことになりたくなかったなら、先ずは演劇や小説の虚構の中に生きなければなりません。小説的なものは、先ずそれが明らかにしている現実に対して打ち砕かれるように運命付けられています。でも、バルザックの小説的なものは最も長く保持し続けるものです。それは今でも私を照らしてくれています。私が知事や司法官になったとしても、私を照らしてくれるでしょう。それに反してスタンダールは、人間の仕事から引き離します。私が、哲学の書物よりも小説の方に多くの思想を見付けた、と良く言いましたが、その意味がどのようなものかお分かり戴けると思いますが、しかし、それらはどちらも人間の仕業です。栄光の喝采を私たちに表しているそれらの書物は、最も確かな忠告者でもあります。

もしも私がやり直さなければならなかったとしたら、コルネイユとラシーヌとモリエールの思想も又取り上げることでしょう。それらには〈人間性〉があります。それを汲み出すしかありません。そうすると、もう一度その言葉が私を照らしてくれます。というのも〈人間性〉は、あなた方が変えることの出来ない何かを意味しているからです。要するに、その様なことがコントの教えであり、何時でも何処でも成功と称賛が確實になります。でも、私には理由が分からないのですが、その上で社会学者たちはコントを引き合いに出す人々でさえも、何故コントは重要でなかったか、の如く性急に考えるのでしょうか。私には理由が分かりません。ある日私が極めて有力な教授の一人に、その年にはコントを研究したことを会話の中で言った時、彼は私に言いました、「どちらの方ですか。コントは二人いますからね」。彼は『政治学』と『実証哲学講義』を分割するように主張していました。ところが両方ともざっと読んでも関連がありますし、連続しています。何故彼は、不正確で何も齎さない指摘をして喜んでいるのでしょうか。微妙な重要さを失うと人間を殺して仕舞う、と私は時々思いました。その時はどうすれば良いのでしょうか。簡潔さも教えなければならぬのでしょうか。博士服を忘れさせなければならぬのでしょうか。確かにその通りです。しかし、これらの偉そうにしている人々が、臆病から死んで仕舞わないと誰か私に保証してくれるのでしょうか。悲しいかな、私は彼らを脅えさせること以外に、何も知りませんでした。しかしながら私は人間を良く思っていますし、私が前進すればする程そうなのです。

哲学とは関係がないと見做されていても、私が哲学同様に探究していた作家たちの中で私が忘

れてならないのはモンテーニュです。『エッセー』の一章か二章を、生徒一人ひとりに順番に割り当てて、私たちは『エッセー』を隅から隅まで三回以上読みました。しかしながら、モンテーニュには明らかに述べている思想が多く発見されますから、慎重に全てを読まなければ、彼を哲学者と見做すには危険かもしれません。この著者は分かるまでに時間がかかります。私が言ったように、迷うこと無くモンテーニュの事故とか、鉢の話とか、戸口の敷居でのモンテーニュにしろ、人々に平和を表明している処を思い通りに見出すように私は生徒たちを訓練しました。モンテーニュの事故とは、落馬が単に失神に終わらずに、その直前の全ての状況を忘却したことであり、それは一種の第一級の重要な臨床研究です。他の事例でも見出されることですが、幾つかの瞬間の知覚を消した衝撃は、これに先だった知覚の一端も幾つか生じたに違いなかったと思われるのに、欠落させていることに人は気付きます。それは成熟するための時間が十分になかったのか、記憶の中に入っていなかったと信じなければならぬのでしょうか。すると人は本を学ぶように自分自身の人生を学んでいるのでしょうか。もっと正確に言うなら、私たちの知覚は本当のところ、何時も回顧していることであると私は気付きました。例えば、もしもモンテーニュが彼の後を駆けていた下僕の衝撃を避けていたなら、モンテーニュは一連の出来事を見直して、場所と運動と自分自身の行動を思い出していたことでしょう。この時は少なくとも彼は、事物を自分で再現させていたのです。まさに再現するという美しい言葉、そのことを正確に言っているかのようです。何故なら、不意打ちに遭うと人は動物が跳ね上がるように、見ることも認識することもなく行動するからです。衝撃の後には茫然自失がやって来て、その様な見直しは妨げられます。そうしてまさにそこから一度自ら生まれた知覚も妨げられ、その次には抑制されることとなります。私がこの解釈を語るのは、私がついには良心に基づいて知ることと、常に回顧的であることと一致しているからです。こうして私が、この余りに難解な観念を最も良く説明したのが恐らくヴァレリーの長詩「若きパルク」の注釈です。それに従って良心は何時も反省的であり、極端に輝いています。私はこの時、この詩人によって支持されました。彼の芸術によって、その詩の中に彼が取り戻したものは、一連の自然な思想、葛藤、愛情です。それらの思想は全てを照らしています。私の本当の注釈なら、十分に二巻になることを人は見抜くでしょう。しかしもう一度言いますが、それも又あらゆる思想の母への単なる敬意が重要なのです。しかしながら、教科書通りの心理学に退屈している人々は、そこに何らかの光を見付けることでしょう。

鉢の物語（歳を取った時の私の父のために）とか、髪の毛を掴んで父を引きずる息子の物語（生まれ、私の息子よ。何故なら私はそこまでしか私の父を引きずりませんでした）は、モンテーニュが「一言も語らぬ物語」と呼んでいるものの典型です。人が語るように、何も変えずに何も議論しないで受け取るそれらの物語は、博識ある人々には教訓になります。何故なら、それらが作り話であるか、あるいは殆ど全てが作り話であっても、人間の特徴を最高に持っているだけであるからです。それらは決して真偽を問わ

ない物語に私を連れ戻しました。そして批評の下には権威が隠れていると私は思っていました。ところがモンテーニュの数多い引用には、作者の権威に頼っているものは一つもありません。それらの引用は、それ自体で輝いています。それ自体で照らしています。この点で私は、変わることもない或る種の記念碑的な表現が思想の真の源泉であると気付きました。私たちは最早引用しません。そして私たちは彷徨います。モンテーニュの業とその無造作を模倣しようとしていた数



え切れぬ人々のことを、私が言えるのはこれだけです。モンテーニュは幸福の島々であるようなそれらの引用のごく近くを航海しているのです。彼は人間によって支えられています。人間のみによって支えられているのです。彼が書き続けてつけ加えるのも、そこから来ています。それは常に廃墟の上に建てることを考える哲学者たちのやり方ではありません。この様にして私は、それと同じ訓練に目を凝らしました。つまり少なくとも美による精神の形成と発展です。それは実際に少しも人を欺きません。そこから木霊のように、最も美しい散文の一つがはね返りました。「私は何を知らぬか」。彼はこの言葉を私たちに残しました。実際に、人間を超えるものについて私は何を知っているのでしょうか。勿論、人間として私はそれを知り、見抜き、判断し、恥によってそれを刺激します。以上が、簡単に言ってモンテーニュの思想です。『エッセー』のような知識に満ちた事例は、他には決してありません。

モンテーニュは殆ど戦いのことを語っていません。けれども彼は武器のことを良く知っていましたし、恐怖と勇気に関する試練なら経験していました。私は、それらの跡を見つけ出すのが楽しみでした。そしてモンテーニュは、人間に驚くような人物ではなかったことを理解しました。従って彼は平和を作るために、彼以外の者には少しも期待しませんでした。私は彼が、毎日危険の中で平然とドアを開けた儘にしているのを理解しました。今度は私たちに対しても最早用心していませんでした。私たちは彼に崇高さを見出します。私は自分の眼で見て、その本の最も美しい処をこの頁に少し書き写さなければなりません。「防御は企てを引き寄せ、疑念はそれを傷付ける。私は名義と口実が役立つのに慣れていた軍隊の栄光という危険とあらゆる材料を、功績から取り除いて兵士たちの企てを弱めた。正義が死んだ時に勇敢に行われることは、何時も立派な行いである。私は、臆病で謀反を企てた私の家の征服を、彼らに明け渡す。私の家は、ぶつかる人物に閉ざされていない……」。もしも、あなたがこの頁とか、私が語った話とか、モンテーニュとの思わぬ出来事を探したなら、あなたは幾らかの時間がかかるでしょうが、それは最良のものです。何故なら彼は、抜粋が何の役にも立たない作家であるからです。全てを感受しなければならぬ巨大な誠実さによってしか、人は彼から教わらないからです。従って人がそこで身に付けるのは、読書による学習で最も難しいものの一つです。（完）

(1) デュニは、パリ北東の郊外にある町で、一九一四年にル・ブルジェ飛行場が造られた。

(2) ソルフェリーノ橋は、パリのセーヌ川に架かる橋で、チュイルリー公園とオルセー美術館を結んでいた。一八六一年にナポレオン三世が除幕した。命名は一八五九年のソルフェリーノの戦いで勝利を記念したもので、一九九二年までアナトール・フランス通りとチュイルリー通りを結んでいた。現在のレオポール・セダール・サンゴール橋である。

(3) クロティルデ（四七五頃～五四五）は、フランス王妃で、夫のクロビス一世をアウリス派からカトリックに改宗させた。

## わが思索のあと（中）

2016年4月登録

<http://p.booklog.jp/book/101560>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101560>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101560>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ